
モンスターハンターカイザ～変態転生者の狩猟記～

元副会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターカイザ〜変態転生者の狩猟記〜

【Nコード】

N6742X

【作者名】

元副会長

【あらすじ】

世界間のバランスの為に神様に殺されてしまった青年『倉田雅人』は、神様から貰った『仮面ライダーカイザ』としての能力とビークル三台を引っさげ、モンスターの蔓延る世界へ旅立った。

しかし、転生の際の条件として抜かれた記憶が、まさかの『仮面ライダーについて』！？

こうして、会って早々の神様にまで手を出そうとする変態による、『ハンター』としての日々が始まるのであった。

・・・もちろん記憶は戻ります。

そして持たされた力はカイザだけではないようで・・・。

3rdと2ndGを中心に、物語は進行していきます。

プロローグその1（前書き）

やっと二つ目の小説を始めました。

基本的に主人公の一人称。

たまに他のキャラ、または三人称で進行させます。

そして・・・もう一つと比べて『アレ』な描写が多いです。

あくまで比べてですので、ぶっ飛んではないですよ。

プロローグその1

キイイイイイイツ!!

ドンツ!!

ゴキツ!!

「・・・」

キイイイイイイツ!!

ドンツ!!

ゴキツ!!

「・・・」

キイイ・・・

「何度もやらんでもええわ!!」

ピッ

どうしてこうなった！

さっきから何度も見せられてる『事故』の映像。

あの事故に遭っていたのははと考えても俺だ。

そして車に見事に撥ねられた俺の末路はといえば・・・

「電柱に頭ぶつけて首折り・・・うわあ」

あそこまでキレイにゴキツといくと、逆にすごいと思えるのは俺だけか？

いや、だって首だけ当たって折れるっておかしいだろ。

それにしても酷いよな。せっかく近所のおもちゃ屋に入荷された『フォー〇ドライバー』を買いにいかうとして、少しでも早くと近道を選択したというのに、その結果がこれだよ！！

やっぱあれか。

前の日にエロゲ買って夜更かししまくってたから注意力が落ちてたんだな。

うん、そうに違いない！！

ん？『自分がどうなってるのか理解してるのかコイツ』だって？
もちろんさあ！

俺死んだんでしょ。

だってこんなにも自分が死ぬところ見せられたらさ、嫌でも理解できちゃうわけだ。

で、真っ白な空間で大きなテレビを前にしてソファーに座ってふんぞり返ってる、そんな俺がようやく至った謎というのが、

「ここ・・・どこよ?」

「ようやくその疑問に至ったか・・・」

!?!、何者だ!?!

後ろを振り向いた俺の目には、信じられないものが映った。

こ、ここまで大きなモノは見たことないぞ!!!

世の男ども（もちろん俺自身も）が崇める理由がわかるというもの
!!

「胸でっけえ・・・」

「はっきり口に出しているが」

おっといかんいかん。

つい口に出してしまったのか。

だがそんなことは置いといて、さてさて・・・こんな立派なモノを持つ女性は、一体どれほどのものなのか・・・

「・・・」

「?、どうした?」

「……リインフォースにイノベーターの目って」

「これはそういう名前だったのだな」

自分の目だけを指差してそう言う巨乳女性。

リインフォースは知ってるんかい！

なんだ、俺死んでなかったんだな。

夢だ夢、それしかないよもう。

だってあれだよ？ 某アニメのキャラが自分の目の前にいたらさ、これはもう絶対に夢だわ。

っていうか何だよ！ リインフォースにイノベーターの目ってさ！

破壊と調和の融合ってか？ やかましいわ！！

とにかくさっきの映像は捏造か正夢で、俺は病院のベッドの上か自室のベッドの上で眠ってるんだろう。

事故に遭ったとしても遭ってなくても、俺は生きてるはずだ！

「はあ、現実から目を逸らすのはよくないと思うのだが。それに話し合いには『この目』がぴったりと聞いた」

その人、ああもうリインでいいや。うるさいぞ！

夢の中に出てきておいて、何が『よくないと思う』だ！

……でもホントにいい胸してるな。

内容はアレとはいえせつかくの夢だ。

これぐらいしてもいいよな？

モミモミモミ・・・

「んなっ!? 何をする!」

モミモミモミモミ・・・

いやゝ、これはいい。

実にいい!!

大きくてハリがあつて、でも柔かい!

幸せだなあ、夢とはいえこんな美人の胸を揉めるなんてさ。

リインっぽい人も最初こそビックリしてたけど、だんだん身を振じらせてきて・・・堪らん!

「いつ、いつまで、あつ・・・続けっ、る、んっ!!」

うゝん、そりゃもちろん夢から覚めるまででしょう?

でも覚めて欲しくないなあ。

このままずっと続いてくれたら最高だね。

ついでだから服の下から・・・

「アッ・・・ま、まてっ!」

遅い!

すでに侵入後さ!

胸のあれまであと少し・・・

「いい加減に・・・んっ・・・しろっ!!」

「ヒデブツ！」

ドンッ！

・・・ってえ。

く、首が異様に痛い。

夢の中とはいえ、何度も折られてたまるか！
・・・？

『何度も？』

なーんか妙な違和感を感じるんだが。

何故かおかしなほどに、『このこと』を否定したらいけない気がする。

それになんだこの記憶・・・。

第三者視点だけの映像を見てただけなのに、なんで俺自身の視点からの記憶がある！？

いや、今更不思議がることもないか。

なんせ自分で一回その結論に至ってるわけだし。

ああ・・・今度こそ大体わかった。

俺、『倉田雅人』（大学三年生）は

「死んだんだな」

「こ、ここまでするのに時間がかかり過ぎだ！」

そんなに怒らないでくれよ。

ていうか顔が真っ赤だし、表情も緩んでるから意味ないぞ。

「ねえ？ 神様？」

「・・・随分あっさりしているのだな」

「そりゃ、死んだら次に会うって言ったら閻魔大王か神様でしょ。
そして閻魔様は映姫様しか認めんからな！」

「だから私は神と・・・確かに間違っではないいな」

やっぱり神様なんだ。

で、ここに神様がいるってことはさ、あれでしょ？

俺には第二の人生が待ってるんじゃない！？

「流石に察がいい。その通りだ」

なんだよこの神様、心読めるんじゃないか。

そういうやさっきから言ってもないことに反応してたっけ。

なのにさっき俺の『挨拶』を回避しなかったってことは、この人淫
ら・・・

「それ以上考えたら地獄に送り込んでやるからな」

「すいませんでした」

で、神様も暇じゃないんでしょ？

さっさと本題に入ったらどうです？

「ぬう・・・仕方ないな。ハッキリ言おう。お前には別の世界に転
生してもらいたい」

「それは、あんたのミスで俺が死んだからかな？」

もしそうだったらたっぷり特典をもらうさ。

「残念ながら違うな。しかし、私が殺したことに変わりないか」

「はい？それってどういう・・・あんたまさか!？」

目の前の神様は表情を消して頷いた。

つまり、俺の考える中で一番酷いやつみたい。

「そうだ。お前は私が・・・『ワザと』殺した」

「ふっざけるなよ!?!押し倒してやろうか!！」

「そ、それはよせ!」

あ、顔真っ赤。

やめろって、もっと押し倒したくなるじゃないk、違う!!

「説明は、もちろんしてもらえるんでしょうね」

「ああ」

—十数分後—

俺が神様から聞いたところによると・・・

・複数の世界と俺の世界とのバランスが崩れた。
ディ○イドじゃないんだから……。

・どうやら俺の世界のが最も強くなっているようで、バランスを取るためにはこちらから数人、特殊な能力を付けて別の世界に送り込む必要があるらしい。

・いろんな世界に人間を送らなければいけないが、その分それぞれの世界に送り込むのは一人でもいいらしい。多分世界が多すぎるのだろう。

能力付きの人間を分ければ、こちらは数が減り、あちら側は『力』の有る者が入って均衡が保てるわけだ。

・で、厳正なるクジ引きの結果、俺がその中の一人に選ばれた……
・と

「うん、やっぱり押し倒そう♪」

バタッ！

「ま、待て！落ち着いて話しを！」

「アホか！なんだよ厳正なるクジ引きて！なめてんのか！！」

「いやっ！だから特殊な能力を、やっ！そこはダメだ！！」

「勝手に殺されて、能力程度で満足するか！謝罪するならその体よこせ！！」

ホント何なんだよ！

そして俺はこんなところでなにやってんだか。

・・・自分で言うのもなんだが、先が思いやられる。

とりあえず、この神様の反応でもみて楽しもうか。

ブログその1（後書き）

とりあえず今回の反響を見えます。

次回は一週間以内に投稿しますよ。

プロログその2（前書き）

私的に馴染みの方たちから感想を頂けたので、プロログその2、投稿します。

これから先の投稿は・・・不定期で、どうかな？

ヘタに決めるとどっちも潰れそうで今はちょっと怖いです。

それではレッツゴー！

プロローグその2

―押し倒してから数十分後―

とっても可愛がってあげました。

Bまでよ？

でもかなりやらしい事になっております。

「ハア、ハア、ハア……や、やっと諦めたか」

「いんや、能力貰ったら続きな」

だから体制はこのまま。

パツと見は馬乗りだけど、痛くないように膝立ちで耐えてる。

「優しいのかそうでないのかわからん奴だ」

「素直に親切を受け取らない神様には……」

そう言ってゆっくり手を伸ばしていく。

神様も焦ったみたいで、何度も首を縦に振る。

これもまたいい！！

で、俺の能力か……。

んなもんやっぱりさ、アレしかないでしょ！

「仮面ライダーだな!!」

「そ、それは流石に程度が・・・すまない、続けてくれ」

手をわきわきさせて、俺は友人から『悪魔の笑み』と呼ばれるほどの笑みを浮かべると、文句を言おうとした神様も引き下がった。ここから俺のターン！

どうせ心が読めるなら、声に出さなくてもいいだろ。

まずはどのライダーか・・・だな。

俺としては、しっかりとした性能を持った奴がいい。かといって、無駄にチートなライダーもよくない。

RXとかクウガとかディケイドとかない!!・・・あ、文字伏せ損ねた。

誰も気にせんだろうからいいか。

でも、あえてチートで『俺TUEE!!』でも楽しいんだよなあ・・・三人とも好きだし。

とりあえず、昭和はなしかな？

スーパー1やZXみたいなメンテ必要なやつは使い辛いし、ストロングガーなんて選んだら最後、絶対に手袋外せないよ!!

よく考えたら改造人間だから、転生に向いてなさすぎる。その世界に改造する技術がなかったら意味ないよね！

そうするとRXも昭和縛りでだめか・・・。

とにかく、平成のライダー軍団の中から誰か選ぶしかない。

数多過ぎるけどね！

第一に、響鬼系は却下。

いちいち服が燃えてたら、そこの世界のムシヨ行き決定だ。

ダブルは無理。

変身するのは俺一人で十分だ！

絶対にそのほうがいい。

でもジョーカー、アクセル、スカル、エターナルは可。

龍騎系は、どうかなあ・・・。

モンスターの餌が・・・ねえ？

クウガ、ブレイドはリスクがでかい。

カリスになるには人捨てるしかないし、他も融合係数高いと、強いけど人外決定だしな。

クウガも同じだ。

ついでに言うと、オーズもそう。

俺欲望を押さえる自信ないぞ。アッチ方面だけど。

そうになると、アギト、ファイズ、カブト、電王、キバ、ディケイドか。

アギトでG3-X以外を選んだら前世の記憶が危ういし、ファイズは死ぬかもしれん。

カブトは強いだろうなあ・・・まさに『つい〇これる〇ら〇』だろ。

『いろいろ』できそうだが・・・堂々と襲う俺のポリシーに反する！

電王とキバ選んだら、もちろんあの連中が付いて来るだろ。

そうだったら、夜の行動も丸分かりじゃないか！
プライバシーは大事よ！

ディケイド、これが一番無難か？

ん？神様が首横に振ってる。

あ、そうか。

バランス取りの為に送り込んでいて、最終的に俺がぶっ壊したら意味ないのか。

ならどうすれば・・・はっ！

そういや一月ちょっと前って『カイザの日』だったよな・・・。

その時、俺の体に稲妻走る

これだ！！

体は記号だけ埋め込んで、さらに『草加雅人』ならぬ『倉田雅人』なら大丈夫♪』状態にしてもらえればいい！
名前も同じだし。

そしてもちろん俺専用で！！

あん？だったら他のライダーでもそういう処置してもらえばいいって？

ダメだ！俺はカイザに運命を感じたんだからもう反論は許さん！！

・・・やばいRX引きずってるわ。

でもいくら草加仕様になっても、結局は変身し続けたら死んじゃうよな。

ここは神様にO☆N E☆G A☆Iすれば大丈夫っと。

あ、そんなに期待した目しないでいいから・・・期待してるのか!?

ま、まあそれは置いていて、ビークルは三つとも欲しい。

それぞれいいところがあって好きだ!!

とりあえずこんなところか。

神様も『仕方ない』と言った表情で頷いてるし、これで決定だ。

「でも転生するわけだから、さすがにここでは受け取れないか」

「そうだ。その世界で手に入れるしかないが、確実にお前のもとに届くようにしよう」

なら心配ない。

あ、そういえば肝心な事聞いてなかった。

「俺の転生先ってさ、俺が知ってる世界？」

「もちろんそうなのだが・・・な」

まだなんかあるのかい・・・。

続きをどうぞ。

「お前の知っている世界のどれに飛ばされるかは・・・私にもわからヒャンッ!」

さすがにこれは揉まれても文句言えないわ。

もしマ○ラ○とかに飛ばされたらどうすんの!

バジン、バツシャー、スライガーだけじゃ死ぬだろ！！

もうこのまま頂いちゃおうか？

俺初めてだから勝手がわからんけど。

「わ、私も初めてだ・・・あつ、だからやるなら優しく・・・」

ダメだこの神様。

マジで淫乱神だった。

あんたが真似たリインフォースのイメージが崩れ去るよ。

この人は放っておいて、転生先でよろしくやろう。

いや、寂しそうな顔してもだめだからね。

もしあっちで出てきたら今度こそおそ・・・いや、神の座から引きずり降ろされるほどのこととしてやる！

お、流石にこたえたみたい。

これで神様の性的な介入は回避。

そうになると、もうここにも用はない。

「さて、そろそろ第二の人生開始とでもこうかね」

「うう・・・気を付けてな」

「だからそんな顔しても・・・かなりヤバいけどダメだから」

俺の言葉に神様は今度こそ諦めたようで、何もない空間に指を走ら

せる。

すると、彼女の指の軌道に合わせたアーチが現れた。だが、アーチの向こう側は眩しいくらい光のせいで見る事ができない。

神様は自分の作ったアーチを見て満足げに頷くと、また何かを思い出したようにこちらを向いた。
まだなにかあんのか!?

「あー、言いづらいことなんだが・・・」

「わかった。どうしても引き摺り下ろされたいみたいだな。協力してやるよ」

「ち、違う! 転生にあたっての、こちらからの条件だ」

いや、ディケイド選択不可は十分酷いだろ。
あれになれたら一気に・・・多分オーズ（フォーゼもあるかも）までのライダーに変身できただろうにさ。

「その条件というのが、んっ! だから話をっ!」
知るか!

さあさあ早く言いなさいよ。
手は止めるからさ。

「ハア、ハア・・・条件は、転生時にお前の記憶の中から、ある記憶を消させてもらう」

「そいつは、『俺自身』のことも入るのか?」

もしそうだったら冗談じゃない。

転生しても前の自分のことを覚えてないってことは、ただ無駄な知識がある、本人としても気持ちの悪い人間になる。

「いや、自身のことは対象に入らない。お前の考える『無駄な知識』の中のどれかだ」

「それに、なにかしらのきっかけがあればその記憶も戻ってくる」

ふーん、なら大丈夫か。

んじゃ今度こそ行こうかね。

「サンキュー神様。なかなかいいもの頂いたよ」

もちろんその胸も含めてな！

「あ、ああ。喜んでもらえたならいいんだ」

それを聞いた俺は、門矢士みたいに手を振りながら、アーチに向かって歩きだす。

さあ、第二の人生のスタートだ！

向こうではあくまで紳士として過ごそう。女の子に逃げられたら悲しいじゃない？

んじゃま、レッツゴー！！

俺はアーチの向こう側に踏み出した。

―神様Side―

ふう、ようやく行ったか。

あそこまで私に馴れ馴れしいやつは初めてだ。

そ、それに私に手を出してきたのもあいつが初めてだな。

そんな奴には、ちょっとしたサービスをしてやらんと。

いや、お礼などを期待しているわけではないぞ!?

本当だ!

「一つでは戦い辛いだろうし、どうせなら『三つ』とも送りつけてやるわ!」

私は目の前に『五つ』のケースを呼び出すと、その中の三つを手元に寄せ、中身を確認してから少し手を加え、あいつの後を追わせる。

然るべき時に届くであろう。

『三台のバイク』も、同じように手を加えてから送った。

あ、負担は皆無にしたが『専用』のほうは忘れていた!

バイクのほうには仕込んだが、肝心のベルトが・・・。

まあオルフェノクの記号など、持っているとしても数少ないだろうから問題はないか。

そして、残りの2つのベルトはいらん。

『天』は今ここで処分だ。だが『地』まで処分するのは、少し勿体ない気がする。

他の世界・・・仮面ライダーと言えば、『モノリス』のところにでも送ればいいだろう。

ちょうど介入しようとした世界があったはずだ。

『馬鹿を止めようにもライダーが足りぬ』と言っておったしから、『馬男』にでも渡せばよい。

それにしても、あいつは一体どんな世界に行ったのやら。ついでに抜いた記憶も確かめておこう。

私は空間から一冊の本と、一つのフラスコを取り出した。

本があいつが行った世界について。

フラスコの中身が、抜けたあいつの記憶だ。どんな記憶かを示すシールが貼ってあるぞ。

「世界は・・・モンスターハンター、3rdが中心、と」

括弧に『2nd Gもあるよ♪』と書いてあるが、特に気にすることではないか。

さて、次は記憶を確認・・・！？

ま、マズい！

次にあいつに会ったら、絶対に描写できないことをされる！
それもまたいいかもしれんが・・・ってそんな場合ではない！

い、一番消すべきではないものが抜けるとは。

私の持つフラスコに貼られたシールには、こう書かれていた。

「か、仮面・・・ライダー」

ブログその2（後書き）

何気にリリブレとリンクしてました。

タイミングとしてはライダー大戦の少し前ですね。

でもそれぞれの世界で時間の流れはバラバラなので、この先何が起こっても驚かないでくださいね。

いっそ剣崎の次の世界モンハンにしようか・・・。
でもそれじゃ被るから決めれないんだよね。

第一話『どんな世界かわかんが、やることは一つ』(前書き)

今回は短め。

そして転生っと。

これから彼の『ハンター人生』が始まりますW
そして転生後、彼は早速・・・W

今回からは少し抑え目に。

まだまだ子供ですからW

それでは、クエストスタート！

第一話『どんな世界かわからんが、やることは一つ』

「オギヤアオギヤア！！（瞼が開かん！！）」

異世界での俺の第一声がこれだった。

何？まともに喋れてない？当然だろ！産まれたばっかなんだから！
そんな俺をよそに、男性の歓声が聞こえてくる。

「サラ、この子が俺達の子供なんだな！ほーれ、俺が父さんだー！
！」

ぬっ！

この抱っこされている感覚・・・嫌いじゃないわ！！父親は抱っこ
が上手か。

「もう、あなた！この子が嫌がって・・・喜んでるみたいね。なら
いいの」

今のが母親の声なんだな。綺麗でよく通る声してるよ。

まだ顔は見えないが、俺の新しい両親に対する第一印象は、『優し
い』だった。

なるべく迷惑をかけないようにしたいもんだ。

―数日後―

はーい！

ようやく視界やその他もろもろがはっきりして、新しい我が家で母上と二人っきりのマサトですよ！

・・・と言っても目が見えるようになったの、生まれてから一時間ぐらいだったけど。

でもビックリしたよ。

転生先でも同じ名前とは。

俺の新しい名前は、

『マサト・リシェヴィ』

正直考えるだけで嘔みそうだ。

んで、俺の父上の名前が『カズヤ・リシェヴィ』で、母上が『サラ・リシェヴィ』。

どうやら、父上が母上の家に婿養子として迎えられたようだ。

だって、何度か訪ねてきた4人の祖父母の片方が、洋風な名前で姓がリシェヴィ。

もう片方が和風な名前で姓がムラカミだったからな。

でも、家族皆が仲良しなのは嬉しいよ。

俺がいるからってわけでも無さそうだから、遠慮なくどちらにも甘

えるさ！

家族の紹介はこれぐらいにして、現在の俺はと言うと・・・。

「んっ、マサトは中々・・・おませなのね」

母上のおっぱいを堪能中ですよ♪

いきなり何やってんだって？

いやいや、ただのお食事ですよ。

無い歯と非力な手を使って、母上にサービスサービスウ！！

いや、全然非力じゃないんだけどね。

絶対に赤ん坊がだせる力じゃない。

ちなみに父上は仕事なんだって。

俺は起きてる時に部屋から出たことないから、父上がどんなことや
ってるか分からないんだけど、あの人結構マッチョだから、その肉
体を生かした仕事をしているのだろう。

マッチョでिकास父上と、超が付く程の美人で出るところ（特に上）
がしっかり出てる母上。

と言うことは、俺も将来は『誰このイケメン！？』と言われるレベ
ルになるに違いない！

いや、オカマに目をつけられたいわけじゃないよ。

・・・？

『誰このイケメン！？』って、何の誰が言ったセリフだっけ？

そういえば産まれた時も、抱っこされて『嫌いじゃないわ！』って思ったけど、やっぱり誰のセリフか覚えてない。

多分同一人物だろうけどさ、そこから先に思考が繋がらないというか、例えて言うならこの先が崖になってて進めないんだけど。

不思議だ。

まあ、わからないならしょうがない。

またいつかにしよう。

とにかく、今は母上のおっぱいを堪能させていただきますよ。

「サラ！マサト！今帰ったぞ！！」

おっ！父上が帰ってきた！！

抱っこプリーズ父上！

恥？んなもん下の世話の時以外は感じんわ！

その代わり、その時感じる度合いが半端ないけどな。

それに、俺前世の両親は早くに死んじゃったから、素直に喜べるんだよ。

死んだのは小学生の時で、そっからは孤児院で少しだけ過ごして、高校入学を機に一人暮らしを始めた。

だから・・・自分で言うのもなんだけどさ、愛情に飢えてんのな。もう二十歳越えてるのにさ、変な奴だろ？

『いや、それよりもお前の変態度の方が気になる』・・・うーん、言い返せないな。

でも今の両親も好きだけど、前の両親が忘れられない。

だから本当なら『父さん母さん』って呼ぶのに、どうしても『父上母上』になる。

まだ喋れないけど。

二人とも、ごめんなさい。

でも、これからゆっくり直していから、待っててくれ。

お食事と同じく俺のお楽しみの父上抱っこが終わり、次はお風呂・
・なんていくわけなく、体を温かいタオルで吹かれる俺。

確かにタオルなんだけど、皆の服や俺の部屋の内装を見るかぎり日本じゃないのは確か・・・なのか？

だって皆日本語喋ってるからさ、この世界の文字を見ないとさっぱりわからん。

そう思って動かない首の変わりに目だけを限界まで動かすと、あった。

・・・読めん。

何て言ったらいい？

現代風楔形文字？

意味は理解不能だ！

父方の家はムラカミだが、どうやら地球かどうか怪しいぞ。

だが昨日確認した限りだと月はあったし、皆も月って言ってたから断言はできない。

やっぱり地球なのかな。

でも俺の常識が通用しない世界なんだろうなあ。

とにかくだ。文字は1から覚えていこう。

それにしても、気になることがある。

この世界のことではない。

だってそれはその内わかるだろうし、百パーセントマ○ラ○では無いだろうから心配いらない。

俺が気になること、それは世界でも、女の子のレベルの高さでも、母上のスリーサイズでもない。

記憶だ

あの淫乱神の言う通りなら、俺から何かの記憶が抜けているはずだ。現に大きな損失感があって気持ちが悪い。

家族ではない。両親は間違いなく死んでしまったし、俺は一人っ子だった。

友達や知り合いでもない。

学校のこともない。

そもそももちろん彼女のことでもない。

だってそんなものいなかったんだからしょうがないだろ！！

うーん、なんだろう？

主な記憶が抜けている様子が無い。

でも損失感はかなりでかい。

俺にとって、その記憶は余程大事だったのかな？

・・・考えてもしょうがないか。

今は母上の胸を堪能しよう。

おっ！窓の向こうに流れ星！

かわいい女の子に会えますように！

かわいい女の子に会えますように！

かわいい女の子に会えますように……眠し。

あれ？　そういえば俺様から何貰ったんだっけ？

意識が保てるギリギリのレベルだと、考えることもできんな。

とりあえずモミモミ……お休みなさい父上、母上。

こうして赤ん坊な俺の日々はさっさと終わり、いつきなりの五年の年月が過ぎることになる。

もうその頃はすでにこの世界についてある程度学んでいた俺だったが、相変わらず抜けた記憶の正体が解らないままの生活を送っていた。

だがそんなある日、俺の人生にとある事件が起こることになる。

転機……とまではいかないが、大事なことだったんだ。

あれはこの世界での、俺の頼りになる相棒達との、ちょっとした出会
いだったりする。

第一話『どんな世界かわからんが、やることは一つ』（後書き）

次回は五年後、あの三台が登場。

でも記憶は全然戻らない・・・と。

年月はどんどん飛びます。

少しでも早く変身を!!

第二話『俺のハンター生活が・・・？なんだコイツ等』（前書き）

三台のビークルとの出会いの回

今回から、マサトのハンターとしての生活が始まります。
と言ってもまだ五歳w

今回はエロなし。

説明とバイクイベント。

それでは、クエストスタート

第二話『俺のハンター生活が・・・？なんだコイツ等』

Hello! マサトだ!!

あれからいろいろあって、やっとこさ五歳になりました。
いやー、さすがに二回も繰り返すとちよっとつまらなかったけど、
それでもこの世界の情報を得るにはちよっどいい期間だった。

俺が来た世界・・・なんとそれは、

モンスターハンターの世界だったのだ!!

・・・画面の前の皆さん？反応が薄すぎやしませんか？

え、ああ、俺がアーチの向こうに消えてからの事を知ってるわけね。

それじゃあ、俺の記憶に関しても何か知ってるんじゃない？

あ、それは知らないのか。

ちよっと残念。

とにかく！

父上や母上の話を聞いていると、バリバリ聞き覚えのある村とか生物の名前が出てきたんだよ。

最初は二人がモンハンにはまってるだけとか思ってたけど、自室を出て父上のお見送りをする時にあらビックリ！

父上がカッコいい鎧つけて、さらには大剣持って、イカシた笑顔で俺を抱っこしてくれたわけよ。

しかも、かなり見覚えのあるやつを装備してた。

でも、抱っこはいいんだけどさ、腕の防具が刺々しいから中々痛かった。

父上に思いつき手を振って見送ってから、母上に父上の職業を尋ねたら、案の定ハンターでしたよ。

それで世界については納得したんだけど、母上の話を聞いているうちに、結構衝撃的な話が。

なんと父上はG級ハンターで、しかも俺達が住んでるのはかのユクモ村の隣の『ミナモ村』と言うらしい。

今のやつ、解る人にはわかんと思うけど、ちょっと不思議なんだよ。

だってユクモ村は上級までしかクエストが無いはずだし、しかも父上の装備はリオソウル（ランクを考えるとZ）シリーズだった。

あり得ない話なんだ。

だって3rdにレウス亜種は出てこないんだからな。

でも父上の出身を聞いたら納得した。

あの人、ポッケ村の出身なんだって。

それならわかる。

持ってた大剣が『召雷剣』だったのも、あそこにはキリンがいて、尚且つ父上の防具が雷に強いソウルZだからだろう。

そしてハンターの総数の1割程度しかないG級ハンターの父上は、名指しの依頼が多いらしく、危険ではあるけどお金に困る事は無いそう。

父の偉大さを知った俺だったが、でもそれだけじゃなかった。

まさか母上までハンターだったとは・・・。

母上はここミナモ村の出身だったから上級ハンターだったんだけど、それでもここら辺屈指の実力者だったらしい。

そこで、ユクモのギルドマスターに呼ばれてきていた父上と一緒にクエストに行った時に・・・と言うことだ。

「双方一目惚れってさ・・・羨ましいよ」

「マサト、何か言った？」

「な、なんでもありませんよ母上！」

え？お前喋れたのって？五歳だから当然さ！

それに言語は日本語だから、元大学生の俺に死角はない！

話をもどすよ。

電撃結婚に当たって、ポッケかミナモのどっちに住むかの話し合いになると、父上がすぐに『ミナモで暮らそう』って言ったんだと。

G級ハンターがいれば不測の事態にも対応できるから、文句無しで決定した。

でもポッケからの要請もあるから、そのときは里帰りとして家族で行く。

さすがに最初、俺はこっちの祖父母の家で留守番してたんだけど、三歳の頃から一緒に行くようになったんだ。

ポッケ村ね・・・寒い！！流石近くに雪山があるだけあって、すごいガタガタしてたって二人が言ってた。

そんな俺を見て、父上がちっちゃなマフモフ装備を特別に作ってく

れた。

初めてのモンハン装備でさ、俺泣きながらお礼言ったよ。

そしたら父上も母上も嬉しそうで、その後雪山に連れていってくれた。また嬉し泣きした。

でも、雪山でギアノスが突然襲いかかってきて、それを父上が狩ったときはちよっとね・・・。

今度はマジ泣きして、慰められながら帰ったよ。

でも俺も将来はハンターになりたいって思ったから、祖父母の家につくまでには意地で泣き止んで、『頑張ってハンターになる!』って言った。

そしたら祖父母も含めた四人が号泣するぐらい喜んでくれて、ちよっと気恥ずかしかったけど嬉しかった。

でもまだ早いから、六歳から少しずつ訓練を初めて、八歳からユクモの教官のところで見っちり鍛えてもらおうって言う話だっさ。つまり六〜八までの間、両親のもとでの訓練・・・死ぬかもしれんな。

な〜んてことを考えてたら、一年経って六歳になってしまった（笑）
・・・マジかよ。

「それじゃあ母上、行ってきます」

「はい、暗くなる前にちゃんと戻ってくるのよ？」

「もちろん。わかってますって」

六歳になった俺は、ユクモ及びミナモ村に最も近いエリア『溪流』に、『特産キノコ』と『特産タケノコ』を取りに出かけた。

これは一週間に一度必ずやることで、ポイントを変えつつ、ハンターとしての動き方と、いかにしてモンスターを避けるかの訓練だ。

もう五回目になる。

一回目は母上と一緒に、二回目からは一人でやったんだけど、ジャギイのやつらに囲まれかけて死ぬかと思った。でも通りすがりのハンターさん？（俺見てないんだよ）が、ジャギイを蜂の巣にして助けてくれたみたいだ。

散弾ⅠV3ぐらいじゃないかと思うから、母上が助けてくれたんじゃないかと思ってるんだけど（因みにヘビィボウガン使いだ）、ホントに知らないみたいなんだよな。

誰だったんだろう？

それから二回は何もなく無事に採集できたから・・・といっても油断は禁物。

三回目から作ってもらったミニユクモ装備（オトモを二回り大きくした感じ）を身に着け、いざ溪流ヘレッツゴー！！

「・・・・・・・・」

「「「ギャウウウ」」」

「どうしてこうなった」

囲まれました。

四匹です。しかもジャギイノスも一匹サービスされたようです。

って要らねえよそんなサービス！！

とにかく、

「俺は逃げる！！」

どこもかっこ悪くない！

これは戦略的撤退だ！！

幸いキノコ、タケノコは確保済みだから、なんとかしてベースキャンプまでに奴らを撒かないと！

あん？

・・・増えてね？

エリアを移動することになんか付いて来るやつ増えて・・・ああ当然か。

そのエリアにいる奴も追加されるから、雪だるま式になるんだね。

「父上、母上・・・死ぬかもしれません」

え、ええいつ！

なに弱気な事を言っているんだ！

もうエリア2だ。

ここを真っすぐ行けば・・・

ドンッ！！

「ガハッ！！」

なっ！

こいつどっからきやがった！？

突如現れた一匹のジャギイの突進で横に吹っ飛ばされる俺。

危うく崖から真っ逆さまに落ちるところだったが、滑りながらも四肢で踏ん張って耐える。

顔を上げてみれば、例のジャギイの後ろには穴が・・・。
そうか！

ドスジャギイが移動に使うあの穴を利用しやがった!!

やばいぞ。

後ろは崖だし前にはジャギイの大群。

逃げ道がねえ。

しかしにじり寄ってくるジャギイに合わせて、俺も足を引いてしまった。

カランツ

「やばっ! ウツ!!」

ぬ、抜かった!

つい後ろを振り向いたから、その隙を突かれ・・・た。

ガラガラガラガラ・・・

さて、俺はさっそく二度目の死を迎えたんだな。
神様になんて言おうか。

この体じゃ押し倒しもできんぞ。

にしても身動きができないプラス謎の風圧があって、なんとも微妙な気分だ。

・・・ん？

死んだのにまだ体が痛いぞ。

それになんだ、俺は抱えられてるのか？
とにかく目を空けないと。

「んっ・・・ここは」

俺が目を開けると、そこには・・・

『ピロロ』

変なのがいきました。

なにこれ、ロボット！？

銀色のボディーにかっこいいヘッド！
ロマンくすぐるいいデザインだ。

この世界にこんなのいたなんて初めて聞いたぞ！！

それにさっきから感じる浮遊感・・・飛んでんのかコイツ。

す、スッゲーな！

元の世界でもこんないなかったのに、モンハンの世界にいるなんて……。

「なあ、お前なんていう名前なんだ」

『ピロロ　ピロロ』

「ごめん……さっぱりわからん」

『ピロ……』

あ、ハッキリと落ち込んでるのがわかる。

すごい悪い事した気分だ……。

そんなこんなしていると、そいつはベースキャンプに着地した。

そこには俺を驚愕させるには十分すぎるほどのモノが待っていた。

「あゝ、バイク？」

サイドカー付の黒いバイクと、なんかすごいサイズの……バイク？

どっちもかっこよすぎて堪らん！！

でもこれで不自然さがさらに増したぞ。

俺が降りると同時に、二台とも俺の横まで移動してきたし、ロボットもすぐ横に待機したままだ。

こいつ一体だけならまだしも、明らかなオーバーテクノロジーの賜物が他にも二台。

これは臭うぜ!!

でもちよつとだけならいいよな？

何って、そりゃこのバイクに乗るんだよ。

もちろんサイドカー付の方。

前世ではちゃんと大型二輪の免許も持ってたから大丈夫！

「よっこらしよつと」

足が全然届かなかったんだけど、ロボットが抱えて乗ってくれた。
お礼を言ったら、なんか喜んでるみたいだったな。

ブオオオン・・・ブオオオオン

おろ？

こいつも喜んでるのかな？

あ！

でっかいのが乗って欲しそうにこちらを見ている！

ならあっちにも・・・グツ！

「あ、頭が・・・痛い！」

なんだ、こいつらを見てるとどんどん頭が痛くなってくる・・・。

また意識が・・・ガクッ。

第二話『俺のハンター生活が・・・？なんだコイツ等』（後書き）

やけに人間臭い三台。

でも相棒にするならこれぐらいの方がいいと思うのは自分だけ？

こんだけあっても記憶は戻らず。

琴線には触れたけど、記憶のキーはあれではないようで。

次回はとある『アタツシユケース』との邂逅・・・ちよつとだけW

第三話 『容易く記憶が戻ると思ったら、大間違いだぞ!』 (前書き)

ということとで第三話。

サブタイトルの通り戻りません。

詳しくは店頭(話の中)で!

それでは、クエストスタート!

第三話『容易く記憶が戻ると思ったら、大間違いだぞ!』

「・・・い、・・・サト!し・・・ろ!」

「んん・・・ああ」

「「マサト!」」

うおお!ビックリしたあ。

あれ?父上と母上?

それにここは・・・

「僕の部屋?」

は、はい。マサトだ。

今俺は、何故か自室で両親に抱き着かれてるんだけど、一体何が・・

あ！

溪流で崖から落とされて、その後変なロボットに出会って、二台のバイクを見つけて。

そしたら何故か頭が痛くなって、結局意識をなくしたんだった。

「あのロブ・・ハンターさんは？」

この世界の人からすれば、あいつは確実にゴツイ鎧をつけたハンター・・・だよな？

ならここで変なことは言わない方がいい。

「ああ、あの人か！彼ならお前を抱えて村まで連れてきてくれて、俺に出会うとお前をこちらに渡してすぐにどこかへ行ってしまったぞ」

「そう・・・しっかりとお礼言えなかったなあ」

バイクに乗せてもらう時に手伝ってくれて、その時のお礼しか言えなかった。

二回も助けてくれたんだな、あいつ。

もう一回会いたいけど、普段どこにいるかわかんないぞ？

「全くお前は！なんでしつかり逃げなかったんだ！！」

「どうせ逃げ切れずに囲まれたんだろ！！」

「まだまだ訓練が足りん！！」

う、うう・・・なんですぐに父上の部屋でお説教なんだ。
もうかれこれ一時間ぐらいだぞ。

「おいマサト！聞いてるのか！」

「は、ハイイ！！」

長いし正座だから足がしびれて来た。
ぽ、ポッケ村はいつもこういう叱り方なのか？

『ポッケ』のくせに、ユクモより心の在り方が日本人風だなオイ！
確かに俺の知るポッケとは、どこか違った感じだったけど。

「さて、説教もこれくらいにしておこう。何か飲み物を持ってきて
やるから少し待ってろ。あ、正座も崩していいからな」

「はい」

ようやくお説教が終わったか……。
父上がいるときはあまり気にする暇が無かったけど、父上の部屋で
てすごいな。

希少なモンスターの素材を使った小物とか、いろんな街からの感謝
状とか。

「やっぱり一流なんだな」父上はっと……なんだ、あれ」

スーツと部屋を見ていた俺だったけど、部屋に置いてあった『ある
物』が視界に入った瞬間、ソレから目が離せなくなった。

「アタッシュケース……なんでこの部屋に？」

この世界に全く合わない銀色のアタッシュケース。

俺はゆっくりと、引き込まれるように近づいていく。

目の前までくると、ケースの真ん中にロゴが描かれているのに気づ
いた。

「スマート……ブレイン」

どうやら俺の頭はまだまだ使えたらしい。

ロゴの単語を読み取ることができた。

俺の性格上、こういうのは辞書で再確認したいと思うはずなのだが、
今の俺は、自分の言ったことが絶対に正しいという自信があった。

衝動に駆られるように、ゆっくりと手を伸ばしていく。

「ハア・・・ハア」

何故か息遣いまで荒くなってくるが、それが頭の中で響くように聞こえる。

いや、もうそれしか聞こえない。

あと少し・・・あと少し！

指が掛かろうとし・・・

「なーにやってんだマサト」

ビクウツ！！

ギツギツギツ・・・

「ち、父上！」

い、いつの間に！？

・・・そう言う前に、俺は父上の拳骨によって、今日三度目の気絶を味わうことになった。

たっぷり叱られてさらには気絶した後、俺は両親に連れられて、ユクモ村まで足を運んでいた。

理由は言わずもがな、温泉に入る為である。

ここには何度も訪れているが、最初はゲームで見たユクモよりも温泉の数が多くてビックリした。

集会浴場に入ると、通常の集会場とは違った賑やかさがある。

肉体的にも精神的にも（いや、確かに二十歳過ぎだったけどさ）まだまだ子供だった俺は、あまりお酒の臭いがしないここが大好きだった（日本酒っぽい甘い匂いはするけど）。

中に入ってすぐ右にいる番台さん（もちろんアイルーだ）に挨拶&mp;お金を払い、男女別の脱衣場へ入っていく。
3rdじゃ別れてなかったはずだけど、さすがにそうだな・・・
って最初は思った。

でも考えてみれば、俺まだ子供じゃん！！

なら堂々とやろう！

ということで、六歳（精神年齢は27）だけど女性側に入るマサトでした。

グヘヘ・・・たっぷり楽しんでやる。

「あらマサト、こっちに来たの？」

「はい。あっちだと、皆にからかわれるので」

嘘ではない。

すでにハンターとしての道を歩み始めた俺は、男どもからすれば格好の的だ・・・色々とな。

やれまだまだだなくとか、

やれ俺の子供も見習えってんだとか、

やれマサト、お前俺の弟になるか？とか、

最後のやつすごい聞いたことあるんだけど・・・。

「あらマサトくん。こっちにいらっしやいな」

「あ、はい♪」

女性陣には可愛がられております。

グヘヘ・・・笑みが止まらないぜ。

「アアンもう！そこはダメって言うてるでしょ」

「でも嬉しそうですよ？」

どこを何してるのかは・・・ご想像にお任せします。

「・・・後でウチに来ない？」

「（もちろん行きます！）・・・まだ子供なんですけど」

本音は出せない、そんな悲しいお年頃。

「ふー、やっぱり温泉はいい」

こういうところはオヤジな俺だけど、しょうがないよね！

「あつ、マサトー！」

両親と離れて一人のんびりとしている俺の耳が、女の子の声を捉えた。

何故って、そりゃ・・・

混浴だからさ！！

「ねえマサトってば！」

おっと、すっかり忘れてた！

自然にこぼれる笑みを少し抑えつつ、声の方に顔を向ける。

バシャバシャとお湯をかき分けて、俺の方に近づいてくる一人の女の子。

「やあ。ティナも来てたのかい？」

もちろん口調は変える。

猫かぶりと言われようと、俺はまだ、完全に馴染めてないみたいだから。

「うん！マサトも家族で来たのね。さっきお父様とお母様に会ったわ」

そう言っただけの隣に座るウェーブのかかった栗毛のボブカットの少女『ティナ・ハールス』。

俺と同じ年で、同じミナモ村の少女だ。

彼女の両親もハンターで、彼女の母親は昔、俺の母上とコンビを組んで狩りをしていたらしい。

彼女の父親は、父上と同じく別の村からきたみたいだ。

どこの村だっけか・・・忘れた。

そんな二人の娘であるティナも、俺と同じようにハンターを目指しているため、既に訓練を始めている俺の姿にやきもきしてるとかないとか。

小さなころからの付き合いだから、何度も遊びに行っているし、実は・・・フフフ、一緒に寝たこともある。

今は流石にタオルを巻いているが、昔はそんなこともなかったから・・・グフフ。

「あゝ、いまいやらしい事考えてたでしょ！」

「い、いやっ！そんなことはないよ！！」

す、鋭いなティナ！

流石に付き合いが長いだけあって侮れん。

ちよつと疑いの目で見てくるティナへの対応に困っていると、再びバシヤバシヤと音が聞こえてきた。

「ティナ、マサトが困ってるからダメ」

「る、ルー！こんばんは！」

助かった。

ルーのおかげで・・・あ！紹介がまだだった。

このまたまたウェーブのかかった栗毛ロングな少女は、ティナの双子の妹の『ルシール・ハールス』。

俺は『ルー』って呼んでる。

ティナの妹と言っても双子なので、精神年齢に差はない・・・はずなのだが、確実にルーの方が大人びてる。

突っ走りがちなティナをしっかり押さえてくれるので、一緒にいると安心だ。

彼女もハンターを目指しているが、彼女の方は周囲からもOKサインが出ている。

流石に訓練はしていないが、『すぐにマサトにも追いつくから』と言っていた。

抜かれると俺の立場が無いので、それ以来一層気合を入れているのだが、その結果が今回のあれだよ！

もちろんルーとも仲がいいし、ティナと三人で同じベットもざらにあるぞ！

それにしても、ティナもルーも美少女の部類に入っているとつくづく思う。

そんな二人が俺の幼馴染って・・・幸せだなあ。

美少女二人を横に侍らせ、自然にお尻を撫でる。

流石にロリコンではないけど・・・そこ！怪しいって言うな！！
と言ってもこの状況じゃ無駄か。

とにかくこの二人、将来は期待できると思う。

ローラさん（二人の母親）もスタイル抜群だし。

このペッタンコもいつかは・・・

「マサトのエッチ」

「!??く、口に出てた!?!」

「「それもだけど触ってる」」

二人が『ジトー』ってこっち見てるよお！

ここはとりあえず・・・

「すいませんでした!!」

レッツ土下座さ！

お湯の中でだからいつまで息が続くかわからんけ・・・ゴボツ!?

「バビブンバブバビボボ！（何すんだ二人とも！）」

二人とも俺の頭を踏みつけてやがる！

ニヤメロン！

俺にそんな趣味は無いぞ！

攻める方が好きなんだぞ？

後でお仕置きするぞく・・・息が・・・続かん。

「ガハアツ！！はあああ、死ぬかと思った」

「「もうそういうこと言わないって約束する？」」

くそっ！性格は全然違うくせに、妙なところで息ピッタリな双子め・・・。

だが俺もひくわけにはいかんだ！！

「それは無理だね！これが僕という男グハアツ！！」

「「少し頭冷やしたら？」」

「何言ってるんだい！ここは温せゴボゴボ・・・」

あははは・・・人間ってやっぱり浮かぶもんだよね。

顔が下向いてるからこのままじゃ死んじゃうんだけど♪

「二人とも、もう少し加減というものを覚えたほうがいいと思うんだけどなあ？嫁の貰い手無くなるよ？」

「マサトがもらってくれるんでしょ？」

「私はマサトしかないって思ってる」

・・・え？

まさか俺・・・リア充だったのか！？

俺が呆然としてると、二人は顔を見合わせて笑い出した。

ぬぬぬ・・・冗談だったのか。

少々不機嫌になる俺。

「あ、マサト怒ってる？」

「マサトのそういうところも好き」

「どっちなんだ・・・」

「「ひ・み・つ」」

自分よりも精神的にかなり年下の相手に翻弄されるなんて、俺の精神はかなり体に引っ張られてるようだ。

ま、楽しんでるんだけどさ、悔しいことには変わらない。

ということで腹いせに抱き寄せてお尻をなでなで。

二人も何故か動かないから満足。

・・・今度からもう少しだけ、大人な対応ができるようにしようと思っただった。

ティナやルーと一緒に上がって、ドリンク屋の特製ドリンクを頂く。もちろん、飲むときは腰に手を当てるのさ！！

「おっ、マサトも上がったのか」

「ティナ達も一緒だったんだな」

脱衣場ののれんの向こう側から、父上と、二人の父のブレアさんが出てくる。

しばらくすると、母上とローラさんも出て来た。

うーん、大人の色気がムンムンと・・・オウツ!?

「痛っ! 耳は引っ張ったらすごい痛いんだよ!？」

「「惑わされたらダメ!」」

そんな必死な顔して引っ張らなくてもいいじゃないか!!
わかったからこれ以上は・・・千切れる!!

「「アラアラ、これなら安心ね!」」

「マサト・・・娘は渡さんぞ!!」

「お前も俺と同じでモテるんだなくはっはっは!!」

そこの四人もふざけてないで助けようぜ!

この後、結局みんなでミナモに帰り、ティナとルーが泊りに来ることになった。

ブレアさんが怖かったけど、ベッドに寝転がればそんなことは吹っ飛んだ。

だが、俺の頭の中の半分は、父上の部屋で見たアタッシュケースの

ことで占められていた。

だから二人の美少女に挟まれていても、俺は少ししか嬉しくなかった。

うん、少しは嬉しかったんだ。

だからイタズラも少しだけやる。

「やっぱり胸は小さい・・・」

「「あっ・・・じゃなかったうるさい！」」

それ以来、俺は何度も部屋に入ってアタッシュケースを探したが、結局見つかることはなく、その存在はゆっくりと、俺の頭の中から薄れていったんだよ。

第三話『容易く記憶が戻ると思ったら、大間違いだぞ!』(後書き)

マサトにロリコン疑惑

女だったらなんでもいいのか!!
ってか最早ペド

(X) <モチ。それも同年齢だし問題ない

そ、そうだった・・・。

ただのエッチな少年だったこいつ。

第四話 『俺はモンスターを引き寄せる体質なのだろうか』 (前書き)

今回から十歳マサト。

まともなハンター稼業です。

といっても、実は正式なハンターではなく、いまだに訓練生扱いなんですけどね。

この世界で『モンスターを引き寄せる体質』は、人によっては幸、人によっては不幸。

因みに、マサトの場合は不幸。

理由は、彼の思考パターンとそりが合わないから。

それでは、クエストスタート！

第四話 『俺はモンスターを引き寄せる体質なのだろうか』

いろいろあって10歳になりました。

付近の村で『期待のルーキー』として評判のマサトです。
・・・調子に乗ってすいません。

でもすごいでしょ！

10歳なのにドスジャギイを倒すほどの実力を持ってるんだぜ！

それもこれも、厳しい両親と、

「まだまだ踏み込みが甘いぞ！」

「はい！」

「違う！返事は・・・」

「イエッサー！！！」

この教官のおかげだ。

モンハンの定番。

訓練所の教官。

初めて見たときは、『イメージ通りの暑苦しいオッサンだ』とか思ってたよ。

いや、あの時は若かった。

でも今じゃ、『イジリがあるけど、尊敬する教官』だ。

なんでイジリがあるかって言うと、

「教官！あんなところに村長さんが！！」

「なっ！どこだ！！」

・・・こういう事です。

教官ったらユクモ村の村長さんに気があるみたいで、あの人の前だと真っ赤になっちゃってさ。

お堅い教官のために、訓練中にもこう言ってあげてるんだけど、たまに本当にそこに村長さんがいる時がある。

もし『そうだったら』、その時は皆でお祝いしよう。

と言っても、最初からこんな軽口が叩けたわけでもないんだな。

始めたばかりのころは付いていくのが精一杯で、帰ったらティナやルーにマッサージしてもらわないと、次の日は筋肉が悲鳴を上げて辛かった。いや、マッサージは普通の意味だから！

たしかにその後、二人に『お礼』という名の俺流マッサージをしてあげたけどさ？

だって十歳になって、少くしずつ体も変化してきて・・・グフフ。

ハンターとしての『チソ訓練』（なんのネタだっけコレ？でも15

0 kmのスピードボールがどうかだったな。こっちは弾丸回避だ(けど)をし始めて数か月。

両親との厳しい訓練という下積みがようやく体に良い影響を及ぼし、段違いの進化を遂げることに成功した。

そして以前俺を困ってくれたであろう溪流のジャギイ&ジャギイノスどもに復讐できるようになったころ、村長さん&教官(顔真っ赤)から、大型モンスター討伐の依頼がきた。

なにが来るかとワクワクしたが、内容は『ドスジャギイの討伐』。

「中型じゃん」

な〜んて言ってしまったがために、追加ノルマで『ジャギイ&ジャギイノス・計20の討伐』までつけられて、ガツカリしながらクエストに向かった。

今回はその時の話について語ろうか。

多分計三話くらいになるから、心して聞いてほしい。

「教官も酷いよな。あんな追加ノルマなんていらねえよ」

馬車っていかカーグア車？の荷台で揺られながら、誰にも聞こえないように呟く。
普段は基本丁寧だから、クエストの時ぐらいじゃないと元の口調に戻せない。

誰かと一緒のところでこんな口調じゃ、いろいろと怪しまれそうだし。

―ベースキャンプ―

「干し肉よし、塩よし、キノコ・・・嫌いだけどよし」

アイテムの準備は大丈夫なので、食料のチェックに力を入れる。

元の世界ではアイテム使いまくりだったが、やはりリアルともなると金がかかる。

その分体をしっかり鍛えたので、購入するアイテムは回復系が多い。

食料のチェックも終わると、次はプランを練る。

ゲームみたいに走ってれば見つかるのではなく、集団の数を減らしたり、いろんなところに残った形跡を調べたりと、中型以上のモンスターを狩るには手間がかかる。

何故そんなことが言えるのか。そういえば言っていなかったな。

俺は既に中型モンスターを狩ったことがある！

ドスギアノスだ!!

・・・オイ。反応が薄いぞ。
なに? 『アイツが一番弱いだろ』だと?

確かに弱かった。

持ち合わせが無いうえにいきなりだったから、支給された大剣で戦ったのだが、ビックリするぐらい簡単だったよ。

でもあいつの面倒なところはそこじゃない。

移動速度が妙に速いところだ。

ゲームよりも行動範囲広いし、いつも駆け回ってるし、逃げ足も異様なほどだし。

普通に追っかけてたら飢え死にしそうだったので、待ち伏せして、貴重な肉を罠肉にしてしかけてやった。

痺れてるところに薙ぎ払いで足を折り（切れ味の鈍さのせいで叩きつけるのと大差ない）、下っ端どもを呼ぶ前に喉を潰し、じっくり料理した。

この世界での狩りは、不便であり便利である。

できたことができないが、できなかったことができる。

返り血を浴びるのは気持ち悪いが、クエストを達成した時は本当に気持ちいいのだ。

なんだかんだで順応している。

さて、今のクエストに話を戻そうか。

今回のターゲットであるドスジャギイだが、こいつはドスギアノスの比じゃない。

確かにギアノス系には口から吐く唾液という名の氷結液があるが、そんなものはハンターなら軽く避けれる。

ドスジャギイの恐ろしさ、それはみんながお世話になったあのタツクルだ。

よくあるだろう。

他の大型の相手をしている最中に、あいつが割り込んでタツクル。ある程度の距離があるのに、それすら無に帰す謎の射程距離。

そして無駄に威力がデカイ。

それさえなければクズなのに・・・。

あいつのタツクルの犠牲になったハンターの姿を見たことがあるが、鎧はへこみ、肋骨は肺に突き刺さって胸部から血の泡を吐き・・・。

とにかく一流のハンターでも、食らったら大ダメージは必須。

そんな相手に、今の俺の装備ではかなり危険だ・・・が、俺もわざわざ当たるつもりはない。

この世界での俺は足腰には自信がある。

これもチソ訓練と、両親の地獄の・・・うげえ・・・おかげだ。

素で『回避距離UP』が付いてるようなものだからな。
流石に『回避性能+1』とかは無理だったが。

今の装備は『ハンターシリーズ』に『ユクモの太刀改』

千里珠さえあれば・・・あれさえあれば苦勞しないのに・・・。
まあ探知だけでもないよかましただからいいけどさ、あれさえあれば
ペイントボールなんて投げつけなくてもいいんだ。
正直、あれを投げつける瞬間が一番危ない。

どんな状況だろうと、モンスターの注意がこちらに向くことは確実
なのだから。

ドスギアノスの時は使わなかったが、物は試しと同じ雪山のブラン
ゴに使ったときは酷かった。

ジャギイよりも高い攻撃力を持つ奴がこちらを向き、俺がいるとい
う情報は瞬く間に広がっていく。

・・・死ぬかと思った。

「ま、そんな嫌な思い出は放り投げて・・・行きますか!」

まずは足取りを調べんな。

「・・・」
「・・・」

「がうー」

「ギャウウウ・・・」

「いくらなんでもさ」

「オオオンオンオン！！」

「やべ仲間呼びやがった・・・じゃない」

「早過ぎんだろおおお！！」

だがとりあえずは、

「コンニャロ食らえ！」

ヒュン！！

パン！

お、当たった当たった。

とりあえずはコイツさえ当てとけばいいから……。

「そんじゃサイナラ！」

戦略的撤退だ！

「はぁ……早いってあれは」

以前とは違い、ドスジャギイもいる中で撤退することに成功した俺は、奴らのいたエリア6（あの滝のところ）から1に戻り、ガーグア肉を焼きながら作戦を立てている。

やはり1には出てこないようなので、少しでも食料を無駄に使わないように、そこにいたガーグアを狩らせてもらった。

その時卵を落としていったので、そいつは巢まで運んでおいた。

自己満足だが、贖罪のつもりだ。

上手に焼けた肉を食べながら、探知のスキルと地図を用いて奴の位置を確認する。

「8（滝の中）に引っ込んだか……。ダメージを与えたわけじゃないから特に心配じゃないけどな」

だが滝の中ついたら飛竜の巣だ。

それにやつらの巣は俺の隣の2のはずなのに……。

「しかもずっと臨戦態勢ときた。まさか誰かと戦闘中なのか？」

ここは、すこし動いてみるか。

—エリア9（吊り橋&洞窟の裏）—

さて、わざわざこっちまできたが、あいつまだ戦闘中かよ。

んじゃま、こっそりと覗きにいかうか……。おい、覗きは覗きでも嬉しくない方だからな。

コソコソ

コソコソ

チラ〜っと

！？

前言撤回だ。

『嬉しいけど、全く嬉しくない状況』だった。

何故って？

そこに女の子がいるからさ

―その少女Side―

「はぁ、はぁ、はぁ・・・くうう・・・」

私が今置かれている状況は最悪です。

大した準備をしないで採取クエストに出かけて、この洞窟でピッケルを振るっていた私の目の前に現れたのが、既に臨戦態勢に入っていたドスジャギィ。

それは既に仲間を引き連れていて、気付いた時には囲まれてました。

でも私だってハンターの端くれ。

ある程度数を減らしたら逃げようと思ってた・・・けど。

数は減ることがなかったの。

いえ、確かに減らしていた。

でも、私が減らすスピードよりも、ドスジャギイが仲間を呼ぶスピードのほうが圧倒的に速い。

気付けば最初よりも数が多くなって、もう逃げれる状態じゃない。

「パパ・・・ママ・・・」

ごめんなさい。

たった十四年で死んじゃう、娘の親不孝を許して。

「グウウウ・・・」

止めはあなた自身で刺すのね。

もう手も上がらない。

でも武器を構えないなんて、

「そんなの・・・ハンターとして失格じゃないですか!」

私の声と同時に、ドスジャギイが跳びかかって・・・、

「ギャアアアア・・・ギャウ!？」

来なかった。

その代り、

「あつぶね・・・じゃなかった危なかった。無事かな？」

「え・・・」

私の前には、私よりも小さいのに大きな背中をした男の子がいました。

第四話 『俺はモンスターを引き寄せる体質なのだろうか』 (後書き)

装備はまだ普通のモノを。

でも、探知や千里眼はともかく、『ハンター生活』の地図を常時所持している状態ってなんだ。装備で変わるものなのかそれは。

マサト自身のスキルは、回避距離UP、肉体強化（実は神様のプレゼント）。体力、攻撃力、防御力アップ）、変態。

作戦や計画は立ててからやるタイプなのに、その体質？故に無駄になるマサト。

突っ走るのは女性相手のみw

今回出て来た少女が三人目。

四歳年上、つまり十四歳です。

こちらはマジのハンター。

詳しいことはまたは次々回に。

あと二話、このドスジャギイ編。
と言っても、決着は次回w

第五話『ま、ざっとこんなもんよ』(前書き)

ドスジャギイ戦、開始&終了w

やっぱりゲームみたいに、モーションが固定されることもないからやりやすいですね。

今回は基本まともなマサトですw

それでは、クエストスタート!!

第五話『ま、ざっとこんなもんよ』

囲まれながらも果敢に戦う少女・・・といっても少々年上だが、を見て俺が最初に思ったのは、

「いい胸だ」

ということだった。

何故って・・・そりゃ好きだからさ？

俺の周りは普通じゃないけど、本来なら厳しいハンター生活を送る女性が『巨乳』というのは珍しい事だ。
だから俺はとっても幸せ者なのである。

にしてもドスジャギイの奴、まさかモンスター同士じゃなくて、ハンターと戦っていたとは。
しかもそのハンターは女の子で、さらにいいモノを持っている・・・となれば、

「助けるしかないでしょ」

物陰から飛び出し、上がらない腕を必死に上げようとする少女に駆

け寄ろうとする俺。

「そんなの・・・ハンターとして失格じゃないですか!」

そう言って目の前の少女は武器を上げる。

ハンターとしても、いいモノもってんじゃない。

もっと助けたくなったよ!・・・ってドスジャギイ速!!

間に合えよ!!

鍛えた足腰を使って低く跳躍しながら、上段に構えた太刀を一気に振り下ろす。

唐竹割りってな!!

ザスッ!!

「ギャウ!?!」

なんとか退かせるのには成功つと。

「あつぶね・・・じゃなかった危なかった。大丈夫かな?」

ホント危ない。

素が出るところだった。

彼女はキョトンとしてる・・・かわいいなオイ。

「グウウウ」

邪魔すんなボケ！しかもなんで元気なんだよ！！

チッ！鼻先掠めただけだったか！

「下がって、ここは俺がやるからさ」

少々無理やりだけど彼女を後ろにやる。

納得できなくても、下がってもらわないと俺が困る。

「でも！」

「いいから下がって。三度も言わないよ」

あちらさんも待ってくれないから、さっさと下がってくれろと嬉し
いね。

それに、

「君のかわいい顔（と体）に傷がついたら大変だ」

「はうっ・・・」

今すごい恥ずかしい事言っただけで、意外と滑らなかったみたい。
ティナとルーに言ったらきつと滑っただろうけど・・・ハハハ。

「・・・死なないで」

「ん？」

「死なないでくださいね！」

「もちろん！」

女の子にそこまで言われて、それで死んだらそいつはもう男じゃねえ！！

・・・時と場合によるけど。

「ギャウウウウ」

おうおう来た来た。

この桃色空間に耐え切れなくなったのかねえ？

「さあ行つて。絶対に戻ってきたらダメだから」

「わかりました・・・ホントに、死んじゃダメですからね！」

最後にそう言つて、彼女は俺が来た方に走っていった。

今ならエリア2にいるはずのジャギイ達も、全てがここに集まっているからいないはず。

それにしても、かわいかった。

年上なのに、守ってあげたくなるタイプだよ。

・・・やっぱ少し心配だな。

本来なら俺は自分の心配をするべきなんだろうが、正直今なら負ける気がしねえ。

万が一の時は『頼れる味方達』もいるしな！

「さあ、行くぜ！」

真正面から飛び込んで上段から振り下ろす。

当たるも八卦当たらぬも八卦な攻撃だが、少しでも警戒心を与えておけば・・・ふっふっふ。

ザシュッ

「ギャウ!!」

「当たった!？」

え、ええい!

ならこのまま一気にやらせてもらおうぞ!

まずはそのエリマキ!

「もおらったあああ!!」

ブウンッ

・・・これは当たらんのかい!!

お前たちのバックステップ、大嫌いなんだよ!

お!

囲んできたなあ。

今こそ俺の真価を発揮する時が来た。

現実だからできる太刀の様々なモーションの中で、俺が一番最初に覚えたこと。

囲んでくる小型・・・特に俺に痛い目見させたこのジャギイどもへの対策。

気刃大回転切りができるなら、瞬間的な力を発揮できれば・・・、

その場で回転することも十分に可能だ

ハンマーのように吹っ飛ばすこともせず、このリーチを生かした殲滅法。

威力も申し分ない・・・小型にしか使えないのが難点だがな。

太刀を左に引き、そこから腕を精一杯に伸ばして体の後ろに回す。防具をつけながら体を捻じっているから、正直体が痛い。

いやでもホント威力は高いのよ？

でも疲れるから一発でできるだけ減らしたいし、どうせならドスジャギイまで巻き込みたいっていうのが本音。

さあ、どんどん近づいて来いよ。

「「グウウウウ」」

「「ギヤアアウウ」」

「「グルルル・・・」」

鳴き声にも個性？が表れてるのか？
・・・ああ、作者の表現力不足ね。

「掛かってきたら？もしかや怖気づいたのかなあ？」

俺の言葉にピクツと反応を示す。

言葉は分からのだろうが、俺の言い方で理解したってとこか。

じりじりと包囲を狭めてくる

まだだ・・・まだ早い

更に狭める

やっと間合いに入ってきたが、これでも足りん

さらに一歩踏み出して・・・今だ！！

「食うらえ！【廻刃^{かいじん}】！！」

ザザザザザザザザンッ！！

ボトツ、ボトツ

「へ、へへっ。どんなもんだい」

周りを囲む死体の山。

狙った相手はしっかり切った。

「ギャアアウ」

「お前が残ってるのが気に入らねえがな」

三匹ほどの手下を引き連れて、口をあんどりと空けてこちらを見る
ドスジャギイ。

だがすぐに元に戻し、今度は憤怒の表情でこちらを睨みつけてくる。

周りの雑魚はもう気にしなくてもいい。

コイツを切ってさっさと終わらせてやるよ！！

俺が気合いを入れると同時に飛び掛かってくるドスジャギイを、横
に転がって小さく躲す。

そして起き上がると同時に、しゃがんだまま遠心力に任せて後ろに
振る。

手応えあり、しゃがんだままだったから足に当たっているはず。

そこからもう一回前転、距離を取ったところで後ろを振り返れば、

「グウ、グウウ・・・」

左足の大きな裂傷から血を流すドスジャギィ。

ちよっと予想外だったのが、相手の傷がそれほど深くなかった事。

・・・あー、切れ味か。

ユクモの太刀改は、これまでの戦闘・・・っていうかさっきの【廻刃】でボドボドダァ！

・・・いますんごい大事な事言っただけがする！！

「ギャアアウツ！！」

「つてんなこと考えてる場合じゃなかった、な！！」

傷を押して跳びかかるドスジャギィを太刀でいなしつつ、顔面に蹴りを入れる。

しかし怪我をしているのは反対側の足、バランスを崩すほどのモノにはならなかった。

しかし顔を一時的に背けることはできた。

一旦引いて、どう止めを刺すか考よう。

このまま切る・・・無理だな。

もともと切れ味がいいモノではないのに、これ以上やったら刃こぼ

れどころじゃないぞ。

峰を叩きつける。

重さが足りない。却下だ。

バランスがよからうが悪からうが、直接打撃じゃたかが知れてる。
ゲームと同じ・・・っていうほどでもないが、人間の本気の突きな
んて小型を仕留めることもできない。

父上やってたけど・・・。

いや俺にはできないから!!!

ならばどうするか・・・うんわからん。

つとあぶね!

タツクルしやがったコイツ。

一番効果的に・・・できるなら一発で倒せる攻撃

「あった」

ホント、ゲームでの常識に拘ると戦略の幅が減る。

「ギャウウウ・・・ギャウ!!」

ゲームじゃ、

「他の武器のモーションはできないからなあ!!」

ズブッ

「ギャッ!?!」

俺が取った方法・・・それは

「スラッシュアックスの属性解放突きのモーション・・・ってことだ」

つまり、手じゃなくて太刀による突きってね。
口から突っ込んでやったさ!!

「ガア・・・ガッ」

噛みつこうたってそうはいかん!
すぐさま腰の剥ぎ取りナイフを鞘ごと抜いて、つつかえ棒の代わりにする。

「ギャウギャウッ!!」

「お前等は引っ込んでろ!!」

未だに残っていたジャギイやジャギイノス達を牽制しながら、目の前のこいつが息絶えるのを待つ。

しかしそう簡単にやらせてはくれない。
またも囲まれ、にじり寄ってくる。

「ああもう!とつと逃げりゃいいんだよ!!」

いつまでも引かないジャギイども。

イライラするんだよ・・・これもなんだっけか。

そんな事より！

このままじゃ埒があかん。

ぬぬぬう・・・ハッ！

『頼りになる』とか言っというてすっかり忘れてた！

「おい、バジンよーい！」

どこぞの猿の妖怪やサイヤ人のが雲を呼ぶように、洞窟の中でおもいつきり呼んでみた。

こういう風に呼んだの初めてだから、来るかどうかなんてわかんないけど。

キーンッ！バババババッ！！

「ギッ、ギャアッ！」

ん？名前なんで知ってるのかって？

何度か会ってて気になったから聞いたら、自分の指で地面に『オー
トバジン』って書いてたから。

何げにかわいい奴だ。

ついでだから他の二台にも聞いた。

バババババッ！！

「ギャギャギャギャ！」

・・・あいつら指無いから答えたのバジンだけど。

サイドカー付きが『サイドバッシャー』、最早バイクとしても怪しいのが『ジェットスライガー』。

あと、スライガーに近づくとやっぱり頭が痛くなる。

だからと言ってあんまり離れると、悲しそうに（自分でもよくわかるもんだ）こちらを見てくる。

「グ、グアウツ！」

あいつら三台とも人間味溢れすぎじゃね？

ボゴツ！

「ギュウウ・・・（バタツ）」

造った奴すげーなオイ。

「なーんて考えてたら、全部終わってました♪」
『ピロロロロロ』

「さ〜んきゅ♪助かったぜ」

『ピロロ！』

礼を言ったら『どんなもんだい』とでも言いたげに胸を張るバジン。うん、やっぱりこいつ中に人間でも入ってんじゃないのか。

「あ、ちよつと待ってろ。ドスジャギイの剥ぎ取りを終わらせないと」

腐らせたら俺の苦労が報われない。

にしてもちよつとやりすぎたなあ・・・。

こりゃ草食モンスターの間引きしないと凄いのとか来るかも。

肉食が多いのもいかんが、ハンターっていうのはバランスブレイカーだ。

大型を狩ると、それより非力なやつらの数が増える。

すると、狩った大型よりも更にすごいのが、獲物が多くなったそこを狙って集まりだす。

狩れば狩るほど危険度が増すんだなこれが。

まあ絶対そうってこともないから、程度をわきまえた狩りをすればいいってギルドからも容認されてる。

因みに、今回の俺は・・・

「やっぱり、やり過ぎだよなあ・・・ハア」
『ピロロロ・・・ピロ』

目の前に広がる死骸の山を見ながら、俺とバジンはため息を（バジンはフリだ）ついた。

第五話『ま、ざっとこんなもんよ』（後書き）

廻刃なのであって怪人ではないw

その場で行う回転切りです。

もちろん相手を切っているので、数が多いほど負担がでかく、今回も少しバテました。

このような技も作ります。

でも名前考えるのが面倒かもw

バジンは三台の中で一番人間らしく書きますw

やっぱりいい相棒ですねw

一番自由に動けるので、自然と出番も増えます。

今回は『マジメ』でしたが、次回は少しだけアレですw

第六話『神（not淫乱神）は言っている』（前書き）

欲望は解放するものw

これで、一先ずハンター編序章が終了。
そして次回は・・・

とにかく、クエストスタート！

第六話『神（not淫乱神）は言っている』

「ふゝ、やつと戻ってこれ「大丈夫でしたか!？」うおお!？」

ベースキャンプに戻ってきた俺を、巨乳少女が出迎えてくれた。

ああ、戦いに疲れた俺を癒してくれるギルドのサービスだゝって、あの時助けたお姉さんか。

「『僕』は大丈夫だったけど、あなたこそ、怪我はしませんでした?」

「はい!おかげさまで!」

そりゃよかった。

せっかく助けたのに、逃げる途中で怪我なんてされたら意味が無い。

「それ・・・ドスジャギイの?」

「そう。狩り終わったからしっかり剥ぎ取ってきたよ」

おうおう。

そんな尊敬の眼差しで見つめられたら照れるじゃないかゝ。

あ、いやバジンも手伝ってくれたもんな!

ドスジャギイを倒したのはやっぱり俺だけど。

「でも本当にすごいです！あれだけのモンスターの、ドスジャギイを討伐するなんて！」

「そんな事無いよ。父上と母上に比べたら、僕なんて全然」

再びガーグア車に揺られながら、隣に座るお姉さん『リサ・マクラウド』との会話を楽しむ俺。

しかし俺の視線は、彼女の胸部に集中したままだった。

いや、会話もちゃんと聞いているからね？

実際の二人なら、『ドスジャギイ』に囲まれた状態で他の大型モンスターを倒すこともできるだろうし。

「・・・聞いてます？」

「うん。モンスターにOHANASHIしようとしたら返り討ちにあった・・・でしょ？」

「ち、違います！・・・遠くも無いですけど」

当たってたんだ。

ごめん。

今のくだりは全く聞いてなかった。

「とにかく、そんなピンチの私を、マサトくんは颯爽と助けてくれて・・・」

そんなにかっこよかったか？

まあ吊り橋効果かもしれんし、そこまで真に受ける気もないけど。

「もう諦めてたんですけど・・・助かったのが嬉しくて」

「それはリサさんが、最後までハンターらしくいようとしたから。だから僕も間に合ったんだ」

実は少し前から『見守ってました』なんて言えない。

さらに助けたいと思った最初の要因が『胸が大きかったから』なんでもっと言えない！

「でも、私はハンターとしてもまだまだで・・・」

「そんなことない。あの時の言葉は、かっこよかったと思うよ」

リサはキョトンとこちらを見てくる。

やばい・・・押し倒したい・・・じゃなくて！

「『そんなの・・・ハンターとして失格じゃないですか』ってさ」
「はうっ！」

「あれはかっこよかった」

「ははは恥ずかしいです・・・」

恥ずかしがることないんだけどな。

でもモジモジしないでくれないか！

腕が前に出るから、胸が・・・ああ・・・。

「ふふふっ。意外と好きなんですネ♪」

「な!?! 何かな!?!」

「とぼけなくてもいいですよ。さっきからずっと見てたでしょ?」

ば、ばれてくら。

リサの視線も自分の胸にいつてるし、俺と交互に見てくるし!!

「おかしいですね。ハンターなのにこんなに胸があって」

「い、いや! そんなことはない! 家の母上とか知り合いの人妻さんだってハンターだけど大きいから!!!」

人妻とはティナとルーの母親のローラさんのこと。

っていうか何変な弁護してるの俺。

バカなの?

ほらリサだって呆然としてるし!

「・・・ありがとうございます」

「へ?」

「私、ハンターらしいですか?」

う、うん!

「こんな胸でも、おかしくないですか?」

うん!」

「さ、触りたいですか?」

「うん!・・・あ」

「「・・・」」

言っちゃまった。言っちゃまったよ俺。

リサの顔真っ赤じゃん。俺の顔はどうか知らんが。

でもとにかく、

終わった・・・・・・・・

「・・・・ですよ」

「？」

今なんて言った？

よく聞こえなかったけど。

「いいですよ」

「え？」

もう一度、今なんて言った？

俺には意味がよく理解できなかったZE。

「触っても・・・・いいですよ」

「・・・・・・・・？」

済まない。

俺にはやはりよく聞こえなかった。

皆は聞えてた？

なにに・・・・『死ぬ』。それは皆の感想だろうが！！

つまり、聞き間違いでも意味の取り違いでもない・・・・と。

ここは一体どうするべきだろうか。

- 1、喜んで飛びつく（今一番したい）
- 2、謹んで辞退する（多分帰ったらすんごい後悔する）
- 3、ちよつとだけ触らせてもらう（その後1に移行する可能性大）
- 4、そのままいろいろさせてもらう（ヤバス）

・・・我ながらなんちゅう選択肢提示するんじゃ。

2とか選びたくないし、4とかやったらマジヤバス。

1、3は同じところに辿り着くだろ。

つまり・・・揉めと。

神は言っている・・・ここで揉めと！

「やっぱり・・・嫌だよn「そんな事無いから喜んで〜!!」キャッ」

疲れているはずなのに戦闘時以上のスピードを発揮して、俺は彼女の後ろに回り込む。

そしてそのまま・・・

モニュモニュ・・・

「え、あつ、触るだけ・・・」

モニュモニュモニュ・・・

「やんつ、だ、だからっ！触るだけなんですっ！」

ヤバイ。

超柔かいよお・・・。

もう十歳だからさ、母上のも揉めないし・・・かと言ってティナとルーはまだまだ小っちゃいし・・・（なんか今寒気が）

ご無沙汰過ぎて涙出て来た・・・。

どうしようか。

ホントに止まんないんですけど。

オーイ、リササーン？

ハヤクトメテクダサーイ？

「あっ、ああ・・・止められないですよ・・・」

マジですか・・・。

意外と堪能してらっしゃるようで何よりって違うでしょ！

あんたが止めなくて誰が止めるんだよ！！

・・・あ、やっぱ俺か。

「ちょ、中にまでえ！」

「この手を止めるとかやっぱり無理だった〜！」

「ああ！恥ずかしいけど・・・いいかも」

「ならいいよね!」

そのまま『いろんなところ』に手を伸ばしていく。

「ひゃう!?!う、嘘です!だから、ん!そんなに・・・」

人間ってさ、こうなったらもう止まんないのよ。

「もう!ダメって言ったじゃないですか!」

「違うよ。触るだけって言ったんだ」

「ひ、開き直ってもダメなんです!」

「止められないくって言ってたのに?」

「そ、それは・・・」

「リサさんも十分悪いんじゃないのかなあ」

「うう・・・でもあんなどころまで・・・」

村の前に着いた時、ようやく俺の手が満足したらしい。

リサに怒られてしまったが、ちゃんと止めなかった彼女にも責任が・・・あると思います!

「と、とにかく！今回はありがとうございました！」

「もういいよお礼なんて。・・・たっぷり貰ったし」

「ジトー）・・・またいつか会えますか？」

「どうかな。生きてたら会えると思うけどね」

集会浴場と訓練所の分かれ道で、リサはそんなことを聞いてきた。これについては『もちろん』とは言えなかった。

ハンター稼業は、いつ死ぬかわかったもんじゃない。

今回だって、俺が『様子を見に行くか』と思わなければ、リサがいることを知らずにいて、彼女はモンスターの餌食になっていただろう。

「また、会いたいです」

「それには賛成するよ。（また揉みたいし）」

「目がいやらしいですう・・・」

「気のせいでしょう」

後ろ手で手を振りながら、俺はそう言った。

これは俺の本心。

どっちがって？もちろんどっちも。

とにかくリサにまた会うためには、教官の地獄の訓練に耐えきれないとい

思いを新たにし、俺は訓練所の門をくぐった。

この頃、俺は普通のハンター生活を送っていたんだ

だが・・・そう、アレは今から三年前

この時からすれば、五年後のあの日

俺の人生は大きく変わった

いや

『元に戻ったんだ』

第六話『神（not淫乱神）は言っている』（後書き）

第一に胸

（こちらがほとんど）

第二に心意気

いや、そりゃ胸もありますってw

・・・マサトにまともな理由があるほうがほうがおかしい？
ごもつともw

ストックが少なくなってきたw

やっぱり不定期で正解だったか・・・。

でも止まる気はさらさらなのが困り所w

次回もキンクリでお送りいたします。

ベルト編・・・四話にわたっていくつもりです。

それでは

第七話『襲来、そして発見』（前書き）

今回はあれから五年後。

とくに大した変態行為もせず、少し真面目に行きましようか。

それでは、クエストスタート！！

第七話『襲来、そして発見』

ドスジャギイ討伐からもう五年が経ちました。

15歳のマサトです。

精〇とか経験して、ティナとルーに適度？なスキップをとりつつ、俺は『ハンター』としての生活を送って。

12の時、俺はハンターになる事を認められ、無事に、正式なハンターになる事を認められちゃいました。

それからというものの、両親から『家はここだが自分の分は自分で稼げよ』と言われ、見習い時代よりも更に過酷な生活を送る事三年。

ようやく自分なりにハンターらしい生活を送れるようになりました。

ユクモ村のほうに泊りがけでクエストに行くこともしばしば。

だがしかしハンターランクは・・・3！！

これもなんかのネタだったはずだ！！

一年で1ランクずつってさ・・・堪えるわあ。

ゲーム的には速攻で駆け上がるはずの下位クエストを、普通の人と足並み揃えてえっちらおっちら。

キークエストっぽいのをやれば緊急クエストも出ると思ってたんだけど、『緊急』は言葉の通りだったみたいで・・・時間を考えずに突然バアン！！と要請がくる。

だから俺がクエストに出てる間は、ほかの誰かがそのクエストに行く。

そのレベルに達してないハンターは無理でも、緊急を要するからクエスト適正ランクよりも高いランクを持つハンターが駆り出されることもしばしば。

この前だって父上に『お前がいないから仕方なく行ってやったぞ』なんて言われてorzってなった・・・。

「なんでG級ハンターをそこで駆り出す・・・アルビンのジジイ」

アルビンっていうのはユクモのギルドマスターの名前な。

流石に面と向かってジジイなんて言っていないぞ？

まだ本音は隠して生活してるから。

俺が未だにランク3なのはそれだけが原因じゃないんだなー。

さっきも言った生活費云々の話。

あれのせいで全然先に進めなかったんだよ！！

「マサト」。家賃滞納よ」

「それ嘘だよね！自分のヘソクリにしてるじゃない！！」

「流石俺の子だ！サラの罠に気付くとはな！俺も昔は・・・」

あんたも引っかかっとなんかい！！

すぐに請求される家賃を滞納しまいと、なるべく日帰りできるクエスト（つまり安い）を選択し、毎日馬車馬のように働いてたのに・・・。

ある日俺は見たんだ！

母上が夜中、父上とよろしく・・・じゃなかったヘソクリの帳簿と向き合っていたことを！！

その日から俺は、上のやり取りで3分の2を回避しながら、自分の金を貯金し続けた。

ある程度貯まって、数日かかるクエストとかに行けるようになるまでが無駄に長く、そのせいでハンターランクは3までしか行けなかった。

因みに幼馴染のティナとルーの双子の姉妹はランク2。

追いつかなくてホントよかった・・・。

このように、普通になるまで時間がかかった俺が、今までの無駄を帳消しにしようと快進撃を続けていたある日

ついにあの事件が起こった

「・・・やく!・・・げろ・」
「・・・だ!・・・が・・・る!」

「・・・なんだ騒がしい」

自室で寝転がっていた俺は、外から聞える音と声に反応を示した。

音が大きいので声ははっきりと聞こえてこないが、焦ってるような
違うような・・・。

バンツ!!

「マサト!急いで装備をつけろ!!」

「え、父上なんでフル装備?」

「バカ!そんなこと言ってる場合じゃあない!」

「レウスだ。レウスの群れがユクモ(ここ)に来たんだ!!」

「は？」

「ハアアアアアア！？」

ナニITTENDAこの親父は。

ユクモならともかくミナモにレウスの群れつて「オオオオオオン・
・」嘘じゃないみたいですすいません。

「わかったな！装備をつけたらすぐ外に出ろ！そしたら他の奴と一緒に、ある程度の無茶しながら狩れ！」

「普通『無茶するな』って言いませんか！？」

「するなって言ってもお前はするし、そうでもない今回はマズイ！！」

最後にそう言って駆け出していく父上。

そういえば血が付いてたな・・・100%レウスのだけど。

とにかくボーっとしてらんねーな。

現在使っている『鉄刀【襖】』に、俺専用特別強化したユクモ・Mシリーズ（MはマサトのM）をつけて・・・いざ！！

「ゲッターロボ！！発進！！」

・・・なんでもない。

でも好きだったんだよ・・・ゲッター。

俺専用のゲッター系武器作ろう・・・そうしよう。

「で、どこなんだよレウスは!!」

気合いの入る掛け声（いや本気で言ってるからね!?）と共に家を飛び出した方がいいが、リオレウス目標の姿が見つからない。

爆音は聞えてきても、それがどこから聞えるのかがわからない。

そして俺自身、今どこにいるのかも・・・

「わからな「ギャオオオオオオオオ!!」・・・あっちか!!」

煙と炎で染まる空に、レウスの影を見つけた。
見た感じ通り二つ分ぐらい向こうか!

すぐに走り出し、最後の家の角を曲がる・・・ってすぐ近くに俺の家が!

戻ってきてんじゃん!

とにかく!

「行くぜ!行くぜ!行く・・・ぜえ・・・ちょっと待て」

おい嘘だろ・・・『ただのレウス』だけじゃなかったのかよ。

「グルルルル・・・」

20メートルは離れていたが、はっきりわかる『銀色』の甲殻。今まで会ったモンスターのどれよりも勝る威圧感。

これが・・・王者か

「リオレウス・・・き、希少種・・・」

あ、足が動かねえぞオイ。

背中の太刀に伸ばした手が震えてやがる。

逃げなきゃ・・・死ぬ

動かない足を思いっきり抓って動かせる状態に・・・よし！

ゆっくりだ。

気配を消して・・・一歩、二歩、さn

バキィ！！

「！！」

は、はは・・・やっちゃまった。

こんなところに細い木材とか・・・俺運なさすぎだろ。

気付いてる気付いてる。

さっきあいつの頭にビクリマーク見えたもん。
きつと見間違いない。

「グウウウウ・・・」

こっち見んな!!

あっちへ・・・あっちへ行ってくれよ!!

「あ、ああ・・・」

来んな来んな来んな!!

・・・へ? 止まった。

「ゴウウウウ・・・」

ちげえよブレスじゃねえか!!

ふざけんな!!

このユクモMがすごいのは雷だけでほかに耐性なんて付いてねえぞ
!!

そーいやアレどうしたよ!

俺神様からなんか能力貰ってんじゃねえの!?

今まで気にしたことも無かったけどさ、こ、こういうピンチの時に
ズババーンと・・・来ねえ。

ボンッ！！

「あー、死んだわ俺」

目だけは、開けとこうか・・・ね！？

ドオオオン・・・

「・・・おい、ハンターのくせに武器も出さずに死ぬ気か」

「あ、あああ・・・」

な、何でここに

あんたは他のところに行っただんじゃ・・・。

「と言っても俺も限界だ・・・とりあえず家まで連れて・・・け」

バタッ

「父・・・上？」

別人だよな？

今俺の前で倒れてるのは・・・俺の父親じゃないよな？

「ガウウウ！！」

「く、くそっ！！」

近くに転がっていた閃光玉（多分父上の）を投げつけ、父上を担いで家まで走る。

重いけど・・・絶対に下ろすわけにはいかない

「はぁ・・・はぁ・・・」

「着・・・いたか」

家の中に飛び込むようにして入る。

ここならある程度の距離と、間に他の家があるし、レウスが視界を取り戻しても少しは余裕があるはず。

「マサト・・・俺の部屋の入って・・・右角は、な、隠し床にな、てる・・・んだ」

「そこ・・・を、こじ開けて・・・中にあるもの・・・持ってこい」

「わ、わかった!!」

「後・・・」

「ん!?!」

「水とウチケシの実も・・・頼んだ」

「ああ!!」

ウチケシの実は、火傷、凍傷等の『属性やられ』をその名の通り打ち消す実だ。

少し時間がかかるが、数分でそれらを打ち消す。（もちろん傷は残

る)

まず父上の部屋に入る。

入って右角・・・ホントにここか？

普通の床にしか見えないんだけど・・・。
試しに叩いてみるか。

コン、コン、コン！

ここか。

剥ぎ取りナイフでこじ開けて。

・・・こいつ、ここにあったのか。

隠し床の下にあったのは、数年前に一度見て、それからずっと見る
ことの無かった『スマートブレイン』というロゴの入ったアタッシ
ュケース。

あの時とは違って、今は開けたくなる衝動はなかった。

今はそれよりも優先することがあるからな。

「持ってきましたよ」

ウチケシの実を細かく砕き、水と一緒に飲ませる。

「サンキュー・・・はぁ、随分楽になった」

・・・この人ホントに人間か？

効果が出だすまで数分だってば！！

持ってきたアタッシュケースをそばに置き、父上の様子を窺う。

「・・・何やってんだ。『お前が』さっさとソレ開けろ」
「は？」

何で俺なんだ。

まあ開けるけどさ。

アタッシュケースのロックを容易く外す。

現代に生きてればこれぐらいできるもんな。

そして蓋を開けた。

中に入ってたのは・・・

「ベルト？と、ケータイ？」

やけにメカメカしいベルトと、黒いケータイ。

いつ、頭が・・・。

「ほお・・・、中身は、そうなって・・・たのか」

いつの間にか覗き込んでいた父上。
だがまた息が切れてきていた。

「大人しくして！あと、父上は中身見たこと無かったの？」

そういえばおかしい話だ。

ずっと持っていたはずの彼が、中身を知らないだなんて。

「と、うぜんだ。これを・・・開けれるのは・・・多分・・・お前だけだ」

はい？

なんでだよ。

「そいつが何なのかはよく・・・わからん。お前が、生まれた日な？
家のま・・・えに置いて・・・あったんだ」

「時間がない・・・とにかく、それは『多分』お前の・・・力になるはず」

そう言うと、彼は俺の手をしっかりと握ってこう言った。

「お前は生きろ・・・マサト！」

「え・・・」

握っていた力が、抜けた。

手が、床に落ちた。

そして目が・・・閉じられた。

「嘘でしょ？死ぬなんて・・・そんな」

思い切り肩を揺さぶる。
起きて欲しいから。

「ダメだ！死んじゃダメだよ！！」

俺はまだ、あんたを『父さん』って呼んでないぞ

まだ、本当の家族になれてないぞ！

「だから死ぬな・・・父さん！！」

拳を床にたたきつけて、俺は心の底から、初めてそう言った。

「・・・・・・・・（ニヤッ）」

「・・・・あ？」

見間違いか？

なんか口元が吊り上がったような・・・。

「やゝとそう呼んだな？」

「はあ!？」

ニヤニヤしながら、『父さん』はこっちを見てくる。

コイツ・・・死んだフリしてやがった!!

「随分上手いな・・・おい」

「だろ？我ながらこういう演技には自信がグハツ!!」

この野郎。

心配させやがって・・・。

「嬉しいね。息子がやっともな涙みせてくれて」
「うるせえやい・・・うう」

いい感じに感動する雰囲気広がっている。

しかし!

ドオオオン

「ギアアアアウ!!」

「「空気読め」」

家のごく一部を吹っ飛ばして、銀レウスが現れた!!

「とにかく、コレ・・・使ってみるか？」

「おう!! やってやろうじゃん!!」

ケースの中身を取り出して、俺は悠然と立ち上がった。

第七話『襲来、そして発見』（後書き）

ということで次回、ついに変身！

ちなみに、記憶はまだ全然戻っていません。

話の中でゲッター系の武器云々の話、マジでやります。

マサトには歩く武器庫並みに持たせるつもりですw

もちろんゲッタートマホークとかだけじゃなく、超オリジナル武器も開発します。

でも、ゲッターウイング（マントの方）は絶対にはずせない。

それでは

第八話『闇に潜む金色の閃光・・・自分で言っときながら、イタい』(前書き)

ようやく変身来ましたよ。

とりあえず、銀レウスにはさっさと退場してもらいましょうか。

あと三話くらい書いたら、またキンクリします。

ゲッター系武器をはやく出したい。

それでは、クエストスタート!!

第八話『闇に潜む金色の閃光・・・自分で言っときながら、イタい』

「おう！やってやろうじゃん！！」

気合いを入れて外に飛び出す。

「マゝサゝトゝ！大丈夫？」
「ズコー！！」

なんだい母上・・・じゃなかった。

「タイミング悪いぜ・・・母さん」

「あら嬉しい♪やっとそう呼んでくれたのね！」

いや、ホントあんたも空気読んでくれよ。

レウスも呆然としとるわ！

「とにかく、そこの父さんよろしく」

「そんな事より！怪我しちゃだめよ？」

「お、おい『そんなこと』はないだ！『黙って』……ハイ」

「わかってる。帰ったら、話したいこともあるし……」

これで生き残ったら、俺の秘密を話そう。

本当の家族になろう。

……死亡フラグじゃないことを祈る。

母さんは珍しく思案するような表情をしている。

「それって……告白？」

「違うわ！！」

何を言い出すんだこの人は……。

確かに初恋の人はあなただったような、そうでないような。

「もういい。閃光玉頼める？」

「はい♪」

呆然としているままのレウスの目の前に、容赦なく閃光玉を放り投げる。

「グウ！？」

ちょっと待ってろ。

俺は『こいつ』の謎を解かならんのだ。

それにしても・・・うゝん。

どうやって使うんだろうか。

とりあえずベルトを手にとって、腰に。

ガチャ

！！

今一瞬何か見えたぞ！！

なんかすごい懐かしいような・・・。

（「それがお前の抜けた記憶だ」）

あん？

誰の声かと思えば淫乱神様じゃん。

久しぶりゝ。

（「そのような事を言ってる場合ではないだろうに・・・。とにかくケースの中身を全部つけろ。あと私は淫乱ではない」）

・・・もう手遅れだろうに。

はいはい分かりましたよ。

ガチャガチャ・・・。

ごめん。

『どっち』を『どっち』につければいい？

（「十字架のほうが右！カメラが左だ！」）

あゝはいはい。

ってこれカメラだったんだ・・・おう！？

ああ！そうそう！！

仮面ライダーだ！！

あんたこんな大事な記憶を消したがつたのか！！

俺の死因にも関係してるじゃん！！（※プロローグその1参照）

（「そ、それについては・・・すまないと思っている」）

まあいいや。

で、このケータイはどうすんの？

なんかコレとコレ関係の記憶だけまだ抜けてるんだけど。

（「多分キーを押せば戻っていくはずだ。因みに、『変身コードは9、1、3♪・・・だ』」）

なぜそこで歌う。

そしてなんだその歌は。

んじゃま早速開いて・・・。。。

おい開かねーぞこれ

（「馬鹿者！それは折り畳みでもスライドでも、果てはスマホでもないわ！！」）

いや、スマホじゃないのはわかるけど・・・ならなんなのさ！？

（「ターン式だ」）

は？

（「反時計回し・・・やってみろ」）

ふむふむ、お！開いた！！
って画面ちっちゃ！！

「マサト！まだなの？」

「もうちょっと待ってて！！」

で、9・・・『仮面ライダー555』？

1・・・『ライダーズギア』？

3・・・『呪いのベルト』ってコワっ！！

（「エンターを押せ」）

Enter・・・ああ！OK！！

《Standing by》

右手を顔の左前に出して・・・手首を返す!!

そして・・・・・・・・

「変身!!」

んで『カイザドライバー』にこの『カイザフォン』を・・・突き刺す!

《Complete》

「うお!眩し!!」

・・・あー眩しかった。

変身の時って自分も意外と眩しかったりするんだな。

お、ちゃんと変わってる変わってる。

「おお!!」

「かっこいいわよ!」

「ふふふ。もつと褒めて褒めて」

「ギャウウウウウ!!」

このアホレウス! 感傷ぐらい浸らせろ。

一番好きなものに関する記憶が消えて、それがやっと戻って来たんだぞ!?

あとな、一番懂れてたものになれた喜びは天より高し!!

ま、モンスターにそんなこと求めても無駄か。

現に突進してきやがるし!!

「ちょ、大丈夫なのマサト!？」

「だゝじょうぶ大丈夫。見てなって」

突っ込んできたレウスを、右腕一本で止める!!

「よくないなあ・・・」

「相手の力も見極められないなんてさ」

「グウウ!？」

「『あなたは何者!？』ってか? 教えてやるからしっかり覚えとけ!!」

『ファイズ』が闇を切り裂く赤い閃光なら、『こいつ』は闇に潜む
金色の閃光ってどこか

「仮面ライダー・・・カイザだ!!」

右手でレウスを押さえながら記憶とカイザの能力の整理。
やっぱダメだ。

ライダーの記憶を抜いたあの神様を、俺は許すわけにはいかんぞ!!

太陽の子のように毅然な態度で臨まなくちゃな!!

だから帰ったら、OHANASHIしないと♪

— 神様Side —

ほっ、やっと変身^{へんしん}まで漕ぎ着けたか。

思えばこの十五年、あいつは基本ピンチ続きで、私の心が落ち着く

と時のほうが少なかった。

幼いころにジャギイに囲まれたときは、思わず私からの遠隔操作でオートバジンを出してしまったぐらいだからな。(因みに私は三台のビークルの遠隔操作ができる。やつ専用と言っても、それより上にいる私の命令は聞くようにイジツた)

・・・何？

随分やつの事を気に入っているのだなあ！？

ば、バカを言うな！

ああしたのは別にあいつの為ではない！
せ、世界間のバランスを保たせるためには、なるべく生きてもらわなければダメだからそうしたのだ！

ほ、本当だぞ！！

ゾクッ

さ、寒気が・・・。

ちよっと待て、なんであいつはこっちを見てるんだ！？

どこから見てるのか気付いてる・・・とか。

そしてなんで仮面の下からなのに、あの悪魔のような笑みが見えるんだああああ！？

—Side out—

—チエエンジ!!マサトSide!!スイッチオン!—

「オルァ!!」

右手で顔を掴んだまま、左拳を力任せに打ちこむ。

おおすごいすごい。

一発で怯んだ。

「ならこのまま、練習台になってもらおうか!!」

右腰にマウントされた『カイザブレイガン』を手に持ち、カイザフオンからミッションメモリーを引き抜いてセツツ!!

《Ready》

低い電子音声と共に、十字架の一番下から金色に輝く刀身がのびくるのびくるストップ!!

逆手に持って、ダッシュと共に切りかかる。

が、

「外した!?!」

危険を察知した銀レウスが首をなんとか逸らすと、それだけで刃が躲かされてしまった。

確かにこんな逆手持ちが基本の武器なんて使ったことないや。

「ちえっ、こんなことなら・・・」

「片手剣を主武器にすればよかったな！！！！」

今更変える気もないけどね！

ああもう！また躲された！！

「もういっちょ！！」

ブン！！

「ま、まだまだ！！」

ブン！！

「あ・・・当たってくれよお！！」

スカッ！！

・・・上手くいきませんでした。
っていうかどんどん酷くなってく。

「イライラするんだよ・・・」

「あら乱暴」

「あれぐらいでキレるとは・・・まだまだだな」

うるさいぞ観客!!

もうカイザブレイガンはいい!!

・・・直接ぶん殴ってやる!

メモリーを引き抜きブレイガンに戻す。

それと同時に左腰の、記憶が戻ってもカメラに見えない『カイザシヨット』を右拳に。

絶対これただのパンチングユニットだから。

その内カメラとして使うかもしれんけど・・・盗撮とか盗撮とか盗撮とハッ!!
俺は何を!?

《Ready》

「めんどくせえのは辞め。コイツで終わらせてやんよ!!」

《Exceed Charge》

ベルトからくる高濃度のフォトンブラッドの流れを感じながら、正

面から突っ込んでいく。

そんな俺に、レウスは本日二度目のブレスを吐こうと炎を溜める。
あちらさんも一発で仕留めるために、ここ一番と気合いが入る。

でも残念。

それが命取りってね。

相手の状態なども気にせず、どんどん距離を詰めていく。

「「マサト!!」」

安心して見てればいいさ。

せっかくのライダーとしての初陣を、負けて飾るわけにはいかない
からな!!

って近づきすぎたかも・・・。

「ゴォウ!!」

「こりゃヤバす!ハッ!!」

ライダーの身体能力は半端ないわ。

カイザは確かジャンプで30メートルだっけか?
加減とか練習しないと・・・。

何が言いたいかというと・・・飛び過ぎちゃった。

最初から『真上に跳んで避ける』つもりだったんだけど、焦ってやったせいで『跳ぶ』が『飛ぶ』に等しいレベルになっちゃったんだ
ZE☆

急なジャンプは危険だから、良い子は絶対にマネしちゃダメだZE？

落下しながら、右手を思いっきり引く。

イメージとしては、クロコダイルオルフェノクに止めを刺した時のファイズで。

あ、でもカイザのグランインパクトって全然当たらなかった気が・・。

き、気合いじゃあー！！

「でえりやあああああー！！」

死ねこらあああああー！！

グシヤッ

手に残る嫌な感触を振り切って、改めて今回の獲物を見れば、俺からして右、銀レウスからして頭部の左側がものの見事に潰れていた。

グロいです。

かゝなりグロいです。

でも、間違いなくこの勝負

「俺の・・・勝ちだ」

第八話『闇に潜む金色の閃光・・・自分で言っときながら、イタい』（後書き）

今回の銀レウスさんは、限りなく下位に近い上位。

つまり、カイザの上はまだまだいるわけです。

それにしても神様久しぶり。

次次回にはお仕置きしましょうかW

彼女が歌っていたのは、ハイパーバトルビデオのアレW

それでは

第九話『ホント、俺にはもったいない』（前書き）

こちらでも遅れてました・・・すみません！！

今回のサブタイは、・・・読んでくれればわかります。

あと、カイザブレイガンでの必殺技は、『ゼノクラッシュ』で通します。

カイザスラッシュは自分的にいただけないので。

それでは、クエストスタート！！

第九話『ホント、俺にはもったいない』

とりあえず初戦を勝利で飾ったことで安心し、そのまま変身を解除しようとした……

ドオオオン

けどやっぱりやめました。

「父さん母さん！残りの数は！？」

「入ってきたのがそいつを含めて十五。俺が4、ブレアが3」

「私とローラで4よ」

父さんとブレアさんはわかる？けど、現役退いた母親二人で4って何！？

隣の父さんも目、見開いてるって！！

いや、でもあんたの『4』も十分おかしいから。

この短時間で何やってんだ！

ミナモ村って……実はチート村か……（今更な気がしないでも

ない)

とにかく残りは3

1、2頭はハーヴェイ夫婦（ブレア&ローラ）が仕留めてくれるだろうけど、残りは俺が行くしかないな。

「残りの掃除に行ってくる！」

「任せた」

「私たちは待ってるから」

二人の返事を聞きながら、今度は加減したジャンプで自分の家の屋根に上る。

自慢じゃないが大きな家だ。

飛び乗れさえすればあたりを見渡すくらい・・・おっとした。

あっちの二頭は戦闘中。

ん？最後の一頭・・・下向いて何を・・・！！

「くそっ！！」

今度は加減無しで飛び降りた。

家等の建物はジャンプで飛び越え、目的地に素早く到着する。

40メートルほどまで近づけば、やつが何をしようとしているのかハッキリわかる。

・・・捕食だ。

多分標的は人間。

気付いたのに犠牲にするわけにはいかんだろ！！
ってあの装備どっかで・・・嘘だろおい！！

レウスに押さえつけられてるのは、俺がよく知る人物だった。

見間違えるわけがない。

『ずっと一緒だった幼馴染テイナの姿を』

しかもルーのボウガンっぽい瓦礫の山の近くに見える。

ちっ！こっからじゃグランインパクトは間に合わない。

・・・ならイチかバチか！！

《Ready》

《Exceed Charge》

ブレイガンのコッキングレバーを引いて、エネルギーの充填と共に撃ち出す。

「ギャア!?!」

発射され、着弾した弾丸^{ッレ}は、レウスを網で包むかのように広がり自由を奪う。

ただでさえ足幅を狭くしているやつが、バランスを崩してティナの上に倒れこむ前に!

「させるかあああああ!!」

Xの光と共に飛び込んだ

そして『レウスの体の中に飛び込んだ』俺は、相手の体に穴を空けずに『貫通』する。

空に向かって伸びきったレウスを、誰も何もない方向に蹴り飛ばしたら・・・

粉塵でなにも見えなくなりました。

―ティナSide―

お父さんとお母さんに文字通り叩き起こされると、私たちの村がリオレウスの大群に襲われてた。

二人はすぐに行ってしまったので、私はすでに準備を始めてたルーと一緒に、他の皆の手伝いをしようと家を出る。
私たちの実力じゃ、まだ火竜なんて倒せない。

マサトに追いつけるかなうって思ってたけど、あいつの実力は半端なかったわね。

生活の為に遅れてただけだなんて・・・。
それを聞いた時、ぬか喜びになってしまったことによる怒りをマサトにぶつけた私とルーは、悪くないと思う。
え、悪い？・・・ごめんなさい。

とにかく、まだ一人前とは程遠い私たちは、援護にまわって少しでも役に立とうとした。

ちようどルーはガンナーだったし・・・私？・・・そ、双剣使用よ！！

とにかく二人で移動していたら、突然目の前にリオレウスが降りてきて・・・情けないことに、私は足が竦んだわ。

そんな私を庇うためにルーがあいつの気を引きつけてくれたんだけど、そしたらルーが壁に叩きつけられて・・・。

そのままへたり込んだ私の上にリオレウスが降りてきて、私の腕を足で抑えようとしてきた。

右腕のほうは避けたけど、左腕は押さえつけられた。

正直潰されなかったのが不思議なぐらいよ。

正面に見える顔が怖くて、右手で顔を覆ったら、どこからか聞いたこともない声？音？が聞こえた。

そしたらリオレウスの抑える力が弱まって、それと同時に

「させるかああああ！！」

っていうどつかで聞いたことのある声と、思わず目を瞑るくらいの眩しい光が目の前で。

その閃光玉みたいな光のせいで目が見えなくなったんだけど、何度か瞬きをしたらちよつとずつ見えるようになったの。

そしたら上にいたはずのリオレウスはいないし、あたりは煙で結局見えないし。

よくわからないけど助かったのかなうって思ったら、

「二人に手え出すたぁいい度胸してんじゃねえか」

さっきの声と同じ声が聞こえてきて

「ところで、大丈夫だったかな？御嬢さん？」

「な、」

「な？」

「何なのその格好……。あとあんたマサトでしょ」

変な鎧を着て、分かりやすく動揺してるマサトっぽいのがいた。

—マサトSide—

「何なのその格好……。あとあんたマサトでしょ」

・・・なぜわかったし

「あんた分かりやすいのよ。それに、今更声を聞き間違えると思っ
てんの？」

「さ、さいでっか」

「ああ、あと」

まだなんか指摘があんのか。

「喋り方はそっちの方が好きよ？」

「ハイ喜んでー！！」

な〜んだ。

紳士的な態度じゃダメだったのね。

もうこれから素でいこう。うんそうしよう！

「で、怪我は大丈夫か」

「運がよかったわ。どこも折れてないもの。っていうか、ルーの心配をしたほうがいいと思う」

あ、やべっ！

急いでルーがいるであろう瓦礫の山をどんどん崩していくと

「マサト、遅い」

「それはゴメン・・・でもやっぱ何故バレたし」

瓦礫の中で体操座りをしながら、ジト目でこっちを見てくるルーがいた。

バレたのは衝撃的だったが、とりあえず・・・

「二人とも、無事でよかった」

変身は解かず、二人を引き連れ家に戻る。

家の前にはうちの両親と、ティナ&ルーの両親が待ってた。

「二人とも無事だったか!？」

二人の父親のブレアさんが駆け寄ってくる。

母親のローラさんは、無事な様子を見て胸をなでおろしていた。

俺は二人をブレアさんに引き渡すと、そのまま両親のところに歩み寄る。

「クエスト完了。火竜リオレウスの討伐、並びに少女二人を救助、ってね」

「よくやった!!」

「自慢の息子よ♪」

母さんの言葉に、ハーヴェイ夫婦が頭上に疑問符を浮かべた。

あ、説明はしてないのね。

ということで変身解除。

「「!？」」

あ、このビックリさせた感じ・・・なかなかいい。

あなた達の娘二人の反応が薄くて薄くて・・・。

「んじゃまとりあえず、うちの家でOHANASHIしましょうかね」

あ、間違えた。

「それが素？」

「あー、はい。今までの演技？でした」

机に全員が着席すると、ローラさんがまずそう聞いてきた。流石に、目上の人にはある程度丁寧に話すけど。すると今度はブレアさんが身を乗り出してくる。

「さっきのはなんだ？」

「あれは『仮面ライダーカイザ』。『スマートブレイン』が開発したライダーズギアの一つで変身した特殊強化スーツです」

「？・・・とにかく俺たちの使う防具の類ではないんだな」

「そう。全くと言っていいほど別次元のものだったりします」

正直に言えば、この世界の防具だって意味がわからんけど。

でも『ベルト』の力はそれ以上に意味不明だ。

動きを阻害するどころか助長してくれるし、パンチ一発でレウスが怯む。

必殺技を使えば相手は死ぬ。

ヤバイ・・・俺TUEE・・・。

「で、俺達に話があるんだろ？」

「その事も含めて・・・ね？」

そうだった。

なら、話そうかね。

俺の『二十二年』について

「俺は・・・ただの人間じゃない」

「「「「「知ってる」「」「」」

「あ、そうなんだ・・・って違う」

「俺は・・・普通の人間とは確実に違う生まれ方をしてるんだ」

「どういうこと？」

確かに母さんは疑問に思うだろうな。

俺が生まれた時には異変も何も無かったみたいだし。

「そいつは、お前が『妙に』賢かったことに関係するのか？」

「流石父さん、ご名答」

やっぱり気付いてたか。

なるべく抑えるつもりではいたけど、途中からやめてたし。

「俺には、前世の記憶があるっていうか、うーん・・・転生してんだ」

こっからは俺の説明についてまとめるぞ

- ・俺は転生者で、神様にわざと殺されたこと
- ・バランス取りのためにどこかの世界に送られることになったこと
- ・そのために、あのベルトを貰ったこと
- ・俺の前世での暮らし
- ・そして俺は女性が大好きだ。胸が大きいとなおよい

最後の部分は口が滑った。

そしたらティナ（唯一胸がまだまだ）が凄く落ち込んだ。母さんを含めた三人は誇らしげに胸を張ったため、俺を含めた男三人の視線がそれぞれに向けられたのはしょうがないことだ。

にしてもルーの・・・でかくなったな。

おっと違う！

今は俺についてだ。

「とりあえずこんなところ。何か質問は？」

「なら私から。マサト、あなたはこの後、どうするつもりだったの？」

オウ！

さすが母さん。バッチリ見破られてる。

「みんながどういう反応だろうと、1人でここを出るつもりだった・・・」

「な、なんでよ!？」

「いやさ、こんな変な奴いたら気色悪いだろうSグハツ!!」

「ハア・・・お前、本気で言ってるのか」

父さんに思いつき殴られた。
か、顔が変形するかと・・・。

「真面目に聞け」

「は、はい!!」

「お前の意見は却下だ」

「なっ・・・」

「稀少種ごときにビビッてるやつが、1人で生きていけると思ってるのか」

うつ、そこは言われるとキツイ。

でも俺にはカイザドライバーが・・・

「それにな、力があっても、それを使いこなせてないなど独り立ち以前の問題だ」

「現にお前、自分の武器もまともに使えてないだろうに」

た、確かに・・・。

カイザブレイガン・ブレイドモード、命中率・・・0%。

ゼノクラッシュは必中だからノーカンだけど、これは戦闘で使えるレベルじゃない。

「第一にだ」

ま、まだなんかあるのか・・・？

「俺とサラが、『大事な一人息子』をむざむざ死なせに行かせると思ってるのかこのストコドッコイ！」

「え・・・」

「そうねえ。『私のマサト』がもし死んじゃったりしたら、私悲しくて後を追っちゃうわよ？」

「え・・・」

つまり俺、二人に受け入れられてる？
こんな変な奴なのにな？

「お前が息子ってことに、変わりはない！」
「そうよそうよ」

なんだよソレ・・・。
軽すぎるだろ・・・。

もっと考える問題じゃないのか？

ホントに、それでいいのか？

「で、お前の返事は」

そんなの・・・決まってるじゃんかよ・・・。

「こんな息子ですが・・・これから、よろしくお願いします・・・」

「・・・えぐ」

「なんでティナが先に泣くんだよ」

「だってえ・・・。私だけじゃないし・・・」

そう言われて見渡せば、ハーヴェイ家は皆泣いてるよ。
なんだよ。

主役は泣いてない・・・・・・と思ってただけだなあ。

「やばい。ちょっと、我慢できなかった・・・ううう・・・」

「ふっふっふ。さあ泣け。父さんがしっかり「もちろん母さんの胸の中よね？」「ちよっ」

良い両親だなあ・・・ほんと。

俺には勿体ないぐらいだ。

でもいつかは、

堂々と胸を張って、『二人の息子』だと言えるようになりたいもんだ

俺の命題だな

第九話『ホント、俺にはもったいない』（後書き）

こんな感じで、正真正銘の家族になるわけです。

にしても、ゼノクラッシュの描写って難しいなオイ。

まあとにかく戦闘は終了。

でもまだ一日は終わらないw

次々回の話が終わったら再びキンクリします。

それでは

第十話『レッツ検証！・・・っておい。このケース×2はなんだ』(前書き)

随分と・・・お待ちしました！

今回は(も?)サブタイがネタバレ過ぎるW
まあ、マサトの能力確認です。

それでは、クエストスタート!!

第十話『レッツ検証!・・・っておい。このケース×2はなんだ』

そんなこんなで俺は本当の家族認定をされたわけだが、未だに夜は明けてない。

なぜ飛ばさないのかというと、結構大事な事を忘れていたからだ。

「あ、母さん。ケース取って」

「え? ええ、でもどうするの?」

中からカイザフォンを取り出す。
すると家の中の視線が俺に集中した。

「ちょっと実験をば。みんな外に出て」

・・・これは中でやる実験じゃ、いや検証じゃないからな。

「どうせ呼ぶならデルタムーバーで呼びたかったなあ・・・」

あれの音声入力かっこいいじゃん。

北崎みたいにやってみたいじゃん！！

「なにブツブツ言ってるのよ。早くやったら？」

ちえ、うるさい幼馴染だ。

揉むぞ？

「ティナのソレじゃ満足できない。私ので」

「心を読むな。あとお前は恥じらってくれたほうがそそる」

この双子は・・・。

何かしら問題ありだな。

まあ揉むのは後にして、

「さっさと『呼びますか』！」

9・8・2・1

《Side Basher Come Crosser》

5・8・2・1

《Auto Vazin Come Crosser》

そして最後に

3・8・2・1

《Jet Sliger Come Croser》

「え？今なにやったの？」

ボタン押して、いきなり音声が流れることに慣れてないこっちの方々は頭にクエスチョンマーク。とくにティナのはデカイ。

胸のサイズに反比例するようにグボア！？

「ゴフツ・・・まあ見てろ」

たっくんに言ってみる。

三秒ぐらいしたら、向こうのほうから轟音が・・・音でけえって。

「え、え？何、何なの！？ひゃっ！？」

騒ぎ出したティナの尻を撫でて黙らせながら、轟音のもとを見つめる。

「やっとお前らのことも思い出せた。ありがとな」

目の前に止まった三台のバイクに向かってそう言うのと、バジンはバトルモードに変形し、バsshャーはライトをチカチカさせ、スライガーに至っては、ミサイルを上を発射して・・・!?

「お前何撃ってんの!?!?・・・ああ、花火なのね」

思わず叩いたら、それと同時に爆発。

でも正体は花火だったので、一瞬だけ見とれてしまう。

「ってアホ。紛らわしいことすんな」

もう一度叩いておく。

そんな俺と三台のやり取りを見ていた観客の六人は呆然としていた。

とくに両親はビックリだ。

以前俺を助けてくれた大柄なハンター（バジン）が、まさか当の本人とここまで仲が良かったとは。

ブレアさんとティナは頭から煙を、ローラさんとルーは目をキラキラさせていた。
だが残念かな。

最初に乗り回すのはこの俺だ!

《S t a n d i n g b y》

「変身」

《Complete》

十五とはいえ、身長は今少しなため、カイザに変身する。

あれだよ。皆が不思議に思ってる、『どんな子供でも変身すると大きくなっちゃうんだ』現象。

んで、最初に乗るのは？

「バツシャー、カモン！」

『ピロロロ！？』

バツシャー呼んだら、バジンが「自分じゃないの！？」とばかりに抗議の電子音を上げる。
だが残念かな。

「俺はカイザなんだよね！！」

「え？何、私も！？」

とりあえずティナをサイドカーに乗つけて・・・

「レッツゴー！！」

「ちよつとま・・・いやああああ！？」

お散歩だお散歩。

結果、サイドカーはこころ辺の地形には向いていないことが判明しました。

「うう・・・いつか仕返ししてやるう」

「その時は、『俺のやり方で』十倍返しな」

そう返したらティナが固まった。

俺のやり方ってのをよく理解してるからねえ。

「いつでも来なさいな・・・っと、おいバジン。このケースはなんだ」

バツシャーから降りると、バジンがアタッシュケースを渡してくる。カイザのケースよりも更に小さいソレ。

なんかバジンがケースと自分を指差して・・・まさか!?

ガチャ

「・・・ファイズもあるんかい」

「よろしい、ならば変身だ」

という事で一式をつけたベルトを装着。

変身コードは5・5・5♪

あ、最初の変身の時に神様歌ってたのこの曲か。

《S t a n d i n g b y》

「変身！」

《C o m p l e t e》

赤い光に包まれて、

「仮面ライダーファイズ！ってね」

どうせなら仕草はたつくんっぽく。
手首のスナップかっこいい！！

「つまり、ファイズだから次は自分に乗れと」
『ピロ！』

ブンブン首を振るバジンに、仮面の下で苦笑しながら跨る。

すると至って自然に、俺の腰に腕が回されていた。

「よく乗る気になったな。ルー」

「ティナが乗ったなら、次は私」

対抗心燃やしちゃって、可愛いやつめ。

「しっかり掴まってるよ！」

「——っ！」

今度はツーリングだツーリング。

「ただいまっ。どうだった？」

「最初は・・・辛いけど、最後の方は大丈夫」

確かに最初のほうはトバしたからなあ。

しっかり掴まってくる、ルーの大きな胸を堪能しながらだと余計に力が入っちゃって♪

でもあんまり辛そうだったから安全運転を意識しました！

俺って偉い！！

「偉くない」

「だから心を読むな。ならんとする？」

「Er「やっぱ言うな」・・・しょうがない」

一文字目と二文字目の子音までは同じだけどね！
全然意味が違うだろう？

「んで、最後がスライガーになるわけだけど」

今まで一番関わりが薄かったスライガー。
嫌いだったわけじゃない。

だって近づくといつも頭が痛くなるんだぜ？今は何ともないけどさ。
どうせ原因は神様なんだろう？わかってるって♪

あとでOSHIOKIだな！

「それで・・・バジンこら。『またか』」

その身長からすれば小さなケースを両手で持って、まるで荷物を持った女の子のような立ち方でこちらを見てくるバジン。

カイザとファイズはここにある。

つまり・・・

「デルタキター！！・・・って、ファイズもそうだがあるなら最初に渡せよ！！」

中身はやっぱりデルタギア。

これあったら、音声入力で呼べたのに・・・。

まあ、俺のもとに来たんだからいつでもできるけど。

とにかくいこうか。

スライガーが待ってるし。

デルタムーバーを

「変身」

《Standing By》
《Complete》

青い光に包まれて・・・

「ゴーグリーン！！・・・じゃなかった仮面ライダーデルタ！！」

何故青い光とまで言っておいてグリーンなのかって？
三原がグリーンだから。

わからないやつはゴーゴーフアイズを見ろお!!
ファイズの時よりヘタレてないからあ!!

北崎好きでもなあ、結局三原がデルタなんだよ。

「という訳で同乗者は・・・無しの方向で」

ローラさんの目がマジ怖いです。

あと無しって言ったら母さんも怖くなりました・・・。

「そ、それじゃあゴー!!」

結果

走りにくい・・・。

だってデカいんだもん。

でも、ある程度の飛行能力はあるから狭い場所や障害物は飛び越えればいいんだけどね。

あと、意外と音がうるさくなかった。

おっかしいなあ・・・『ファイズ』でも、かなりの騒音出してたんだけど、乗ってみると意外と大丈夫だった。なら最初呼んだ時の騒音は何さ。

あ？あれは演出？

バラされたいかテメエ・・・。

あと何それ、パネルに日本語出せたんかい！！

『近寄ってくれなかったから見せませんでした』？
バジンを介して言えば良いじゃねえか。

まさか・・・意志疎通ができるのお前だけ？

「んだよバジン・・・プラカードかい・・・」

何ソレ、どこのパンダか宇宙生物？
てかお前はもっと早くできたよね！？

「バッシャーは・・・お前もモニター付きか」

やっぱりできたんかい・・・。
まいつか

相棒たちとの意思疎通が容易くできるのはいいことだから。

「ねえマサト？この文字はなんなのかしら？」

「ああ、これは日本語。俺のいた世界っていうか国の言葉。流石に母さんたちには読めないわなあ」

読めたら逆にヤバイ。

「ちっ、流石に読めんか」

父さん・・・無理だってば。

いくらこの世界の文字が現代風楔形文字だからってさ、丸いひらがな、角ったカタカナ、そしてややこしい漢字をいり混ぜたこの言語は読めんだろう。

「なんか・・・ムカつくわね。その顔」

ドヤ顔さ♪

まあとにかく実験は終了。

「え、ちよっと！マサト!？」

ちよっと・・・休ませてくれい

色々あったし、『大事なOHANASHI』もあんだからさ・・・

「ひ！ひさしぶりだな！！」

十五年ぶりの真っ白空間で、俺はイライラを遠慮なく表に出しながら視線を神様に向ける。

ってか何故声が上がってんだこの人は。

まるで俺がヤバい奴みたいにな……

「どう考えてもそうだな、ッ！い、いきなりい……」

「とりあえず、アンタに口答える権利は無し」

培った瞬発力で回り込み、後ろから鷲掴む。

ホントにイライラしてんのよ？

さうて、思春期真っ盛りなこのマサトくんが、どれだけ我慢できるでしょう？

「んっ！……す、すまない。まさかあんなことになるなんて、ああ！」

「謝罪で済んだらギルドナイトはいらねえ！！」

思わず力が入っちゃったんだぜ。

「とにかく、手は止めてやる。俺があの世界に行ってから、アンタのやった事を洗いざらい話せ」

「て、手は離さないのか？・・・あつ、な、なんでもない！」

この世界でも疲れを引きずったままなので、手は後ろから胸をしつかりと掴みながら胡坐をかき、神様をその上に乗っける。

「さあ、お前の罪を数えろ」

「は、はい・・・」

「こ、こんなところだろうか」

「・・・命令系統の中にお前を入れるな」

とりあえず、声に出して数えてもらった。

どうやらスライガーに近づくたびに起きた頭痛は、俺が『カイザギアに接触していなかったから』らしい。

記憶のキーはカイザギアにあるけど、ファイズ&デルタギアでも触れれば戻る。

だがキー以外のもので記憶を戻そうとすると、その分頭が痛くなるんだと。

俺が、『ケースを二個積んでたスライガー』に近寄れなくて、『父

さんの部屋にあったカイザギア』に近寄れたのは、記憶のキーかそうでないかの違いだったんだな。

でもな、そんなことより優先すべきことがある。

「バジン達に細工・・・は、いい。ベルト三本も、実は嬉しかった。だがな・・・」

「抜く記憶がライダーは無いだろおお!!」

「ご、ごめんなさいい!!」

はあはあ・・・こんの神様はあ!

何で抜く!?

自分で特典つけといて、それが全部無駄になるようなことしやがって!!

こりゃOSHIOKIは絶対だ。

なにがいいかな♪

「な、ならば・・・私の体を・・・やろう」

「は?」

突然何を言い出す。

っていうか自分から捧げられたら罰にならんだろうに。

・・・今すぐ押し倒しても構わんのだろう?

「お、お前はの方が嬉しいだろうからな！それに、そこまで『罰』と言うなら」

そこで一旦止まり、体の向きを変えて俺と向き合う神様。

改めて至近距離で見ても、やっぱりきれいだなこの人。
あと続きを早く言うんだ。

俺の理性もあと四秒しか持たんぞ

「私の体を好きなようにすれば・・・あぁんっ！」

「お言葉に甘えさせてもらおう！！」

もう知らんよ！自分で言ったんだからな！！

「っ、神にっ！二言はぁ、・・・ないぞ」

ならば、俺の二度にわたる人生を通した上での『初めて』を、
アンタに捧げよう。

ま、男のもん貰ったって嬉しいかなだろうが。

「そ、んな・・・んっ、ことは・・・ないっ」

・・・俺が嬉しいっていうか、恥ずかしいっていうか。

あぁもう！流れを持ってくな！！

「はげしっ！も、もう少し！や、さあ・・・しくう」

アーアーキコエナ―イ

こうして、俺の本当に長い一日が終わった。

ベルトの力は・・・まだ使いこなせてない。

ここ（ミナモ）やユクモじゃ、ダメなんだ

もっと、鍛えないとな

『色々と』♪

第十話『レッツ検証!・・・っておい。このケース×2はなんだ』(後書き)

これでライダーズギアは三つそろって、マサトの戦力がさらに強化w

ハンター時の武器をふざけるのもいいですが、どうせならライダーにも新兵器を持たせたいところ。

ちょうど神様と言う便利なお方がいらっしやいますしw

デルタに持たせる新兵器は、実は既に決まっていたりする。いつ出るかわからないけれど。

それでは

第十一話『出発、舞台を一時移そうか』（前書き）

こっちの更新が滞り過ぎてるだろ！！
でも書いてて楽しいのがこの作品だったり。

MOVIE大戦、今日（っていうか昨日）の夜見てきました！
ヤバイ・・・面白すぎる。

でも、唯一言うなら、ウヴァさんエ・・・。
詳しくは劇場で！！

それでは、クエストスタート！！

第十一話『出発、舞台を一時移そうか』

「ねえ・・・ホントに行っちゃうの？」

「行かないで・・・」

「今回ばっかは、二人の頼みは聞けないなあ」

・・・今までもほとんど聞いたことがなかったような・・・いや、そんな鬼畜野郎ではないか。

「「マサトの鬼畜う・・・」」

「ルーだけでなくティナまで心を読むか」

ここでもようやく現状説明と行こうか。

あの襲撃事件から数日後、俺達リシェヴィ家は、父さんの実家であるポツケ村へと引っ越すことになった。

まあ引っ越すって言っても、家はそのままにして別荘扱いになるし、『両親は』何度もこっちに来ることになりそうだから大げさに考え

なくてもいいんだが。

ん？俺？

当分ミナモやユクモに来るつもりはない。

だってこっちに来たら、絶対に温泉に入り浸って二人と・・・もしかしたらリサもいるかもしれんな。

とにかく三人とイチャイチャしてなんもしそうにないし。

「今からでも遅くない。温泉・・・行こ？」

「ニヤメロン！俺を惑わすんじゃない！」

「ルー、流石にそれは卑怯だって」

・・・危うく残るところだった。

そういや引越す理由を言ってなかったな。

ちなみに理由は、『父さんの療養と装備のオーバーホール』、そして『俺の修行』。

本命は俺の修行な。

だって療養したり装備云々はこっちでもできるし、素材とかも父さんがアッチに出向くだけで終わる。

でも俺の修行は、ここじゃダメなんだ。

G級クエストの窓口があるように、ポッケには難易度の高いクエストが多い。

そりゃあれだよ？

ドントルマとかミナガルデみたいな重要度の高いところもあれだけどき、転生前からポツケはお気に入りだからさ。

わかるだろ？

2ndGプレイヤーには（そりゃそうか）。

「すんごく強い強くなって、いい男になったら帰ってくるさ」

帰ってくる気はあるからな。

それがいつになるのかわからんだけど。

「ホントに？」

「帰って・・・くる？」

「もちろん、俺がこんないい女をいつまでも放っておくと思っ
てんの？」

「「・・・嬉しい」」

うんうん。

やっぱり女の子は笑顔がいい。

なうんて腕を組んで考えてたら

唇に触れるあったかいもの×2

・・・What?

「「イイ男になったら、これを返しに来て」」

「「もちろん初めてだから」」

顔を真っ赤にしてそんなこと言われたら・・・襲いたくなるだろうが。

「・・・こりゃ、頑張らんと」

こんな俺でも、この二人は待っててくれるんだな・・・。

「お前たちが誰かに取られる前に、俺が絶対に迎えに来る。だから・・・」

「待っててくれよ?」

「「うん!」」

飛び込んできた二人を抱きしめて、当分感じるこのできないこの温もりを身に沁みこませる。

「・・・ちょっと」

「ど、どこさわってるの」

「だって当分会えないんだぜ？これぐらい許してくれ」

そんな事を言いながら、俺の手は自重することを知らない。

最初はお尻を撫でるだけだったが、どんどんいろんなところに移っていった・・・

「だ、だめ。あんた・・・最後ま、んっ、でいく気で、しょ」

「さすがにつ・・・外、なん、て、あっ・・・恥ずかつ、しい」

ほうほう。

ルーは野外は無理なのか。

・・・っといかな。

流石にこのままだと本当に最後までいきそう。

「ならこれも、帰ってきたら続きな」

「・・・ばか」

「「鬼畜」」

「「変態」」

「「節操なし」」

「・・・お前らなあ」

ムツとしながらも、もう一度二人を抱きしめる。

「行ってきます」

「「行ってらっしゃい」」

そのまま荷車まで歩いていく。
因みに何も繋いでいない。

だって引くのはスライガーだもの

「・・・なにニヤニヤしてんだよ」

「「「別に」？」」」

待っていた大人組がニヤニヤしながらこちらを見ってくる。
なんだよ、ブレアさんは反対派じゃなかったのかよ。

「娘達があそこまでするんだ。認めない訳にはいかんだろう？」

ぬぬぬ・・・。

まあこれで、最大の障害を突破したも同然。

あとは、

「俺が強くなればなんも心配ないよね」

「随分軽いな。そんな調子で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ないぜ父さん」

絶対に帰ってくると決めたから。

修行くらいで止まってらんないね。

「ふっ、そうか。ならそろそろ」

「りょーかいっ！スリー、エイト、トゥー、ワン」

【Jet Slinger Come Crosser】

デルタフォンでスライガーを呼び出し、何故か付いているアタッチメントを使って荷車をくつつける。

「これ、外れるようなことがあったら承知しねえからな？」

『わ、わかってますって』

スライガーに念を押しといって、荷車に乗り込む。
運転しないのかって？

いやさ、ポッケまで遠いし？あんまりスピードは出せないし？

とにかくスライガーに任せた方が楽だし安全だから。

「それじゃあ改めて、行ってきます」

「俺がいない間、この辺は任せたぞ」

「たまには帰ってくるけどね」

と、三人で言えば、

「ま、俺達に任せておけ」

「家の管理もしっかりやっておくわよ」

「うっ、うう・・・行つてらっしゃい」

「やっ、やっぱ行っちゃやだあ・・・」

後半二人が俺の決意を・・・。

「出せ。スライガー」

揺るがす前に、去ろう。

二人はすぐに顔を上げて追いかけてくるが、止めるわけにはいかない。

スライガーが俺の意思を汲んでスピードを上げていく

それでも走る二人に、俺は・・・

「二人とも！大好きだ！愛してる！！」

「だからこそ・・・」

ネバーギブアップ！！・・・じゃなかった

「待っててくれよ！！！！」

その言葉を最後に、俺はミナモ村を去った。

双子Side

「行っちゃったわね」

「・・・うん」

私たちは、マサトを見失った方をずっと見つめていた。

「ねえ、さっきの聞いた？」

「『愛してる』って、絶対に聞いた」

ここで顔を見合わせて、笑った。

何に笑ったか？

それはもちろん、自分の目の前で頬を緩ませる妹（姉）の顔だ。

「ルー、あんたすごいことになってるわよ？」

「ティナこそ、すごい」

マサトがああいう事を言ってくれるのは、実は初めてだった。

目の前でその言葉を言ってくれなかったのは残念、でも次に会う時は、ちゃんと言ってくれと信じてる。

だから・・・

「「待っています。いつまでも」」

そして

「「私も『愛しています』」」

次にこれを言うのは、何時か分からないけど・・・待ってるから。

マサトSide

「いいの？ああい言葉は、面と向かって言わないとダメなのよ？」

「まあ、あの二人なら、お前を待っててくれるだろうが」

「・・・恥ずかしくてまだ言えないっての」

途端にニヤニヤしだすな！！

ちくせう・・・この両親ひでえや。

「と、とにかく！俺の修行、よろしく・・・」

「話をすり替えたな」

「すり替えたわね」

「うっせえやい!!」

そんなこんなやり取りをしてると、バトルモードのバジンが飛んできた。

『来たよ』

「呼んでねえよ。何しに来たんだお前」

『そ、そこまでいう事無いじゃん』

プラカードを瞬時に入れ替えるバジン。

こいつマジでパンダとか蓮○な宇宙人と同じだな。

「で、結局なんなんだ？」

『バsshャーが、もう向こうに着いて、ドッグを造ってるって』

あゝ、その事か。

神様から聞いた話だと、俺の記憶が戻るまで、いや戻ってからも、バジン達は普段、自分たちで建てたドッグで待機してたそうだ。

・・・無駄に高性能だなお前等。

でもそれはあくまでユクモ&ミナモ周辺での話で、ポッケ周辺には

そんなものは無い。

だが予定では年単位で向こうに滞在ときた。

そうになると、新しく建造しないといけなくなる。

で、今回暇だったバジンとバツシャーに任せたわけだが・・・。

「なんでお前がここにいるんだよ・・・」

『えっ、いやっ、そのお・・・』

「あぁん!？」

『ご、ごめんなさぁぁい!!』

そう書かれたプラカードを落としながら、バジンは飛び去って行った。

「マサトってバジンちゃんには厳しいわよねえ」

「優しくしてやればいいものを」

「アイツが悪い」

仕事放ってこっちにこなくても、向こうで建造を終えて待ってれば洗車だろうがなんだろうがしてやったのに。

『それ本当?』

・・・まだ上空に居やがったか。

さてと、デルタムーバーの機能でどこまで狙い撃てるかと・・・

『ちょ、嘘でしょ!?!』

嘘じゃねえよ?

ってかプラカード落とす暇があったらさっさと行けっての!!

『・・・イジワル』

「なんじゃそりゃ・・・」

お前の中身が気になってきた。
ホントにロボットかコイツ?

P i r ~ ♪

ん? 神様からメールか。

因みにこれはファイズフォンが請け負ってる。

だって他の二つとか絶対向いてないだろ。

画面が小っちゃすぎるのと、最早画面が無いもの。

必然的にこいつしか残らない。

『心配せずとも、あれらは確実にロボットだ。まあ、自我はハッキリしているようだが』

・・・お前のせいだろうが。

まあ、こんないつもの調子で、俺たち家族はポケ村へと向かっていくのであった。

第十一話『出発、舞台を一時移そうか』（後書き）

次回から【ポツケ修行編】に入ります。

ティナ、ルー、リサの三人は空気にW

っていうかりサは既に空気W

なるべくスポットライトを当ててあげよう・・・。

第四夫人はポツケ編で出せるといいなW

それでは

第十二話『さっそく修行・・・え、ベルト禁止!?!』(前書き)

超難産でした・・・。

今回からポケでの狩りが始まります。

最初の相手はポケを代表する飛竜からw

この作品はゲームに沿ったオリジナルですが、ゲーム内のイベントは基本的にありません。

それでは、クエストスタート!!

第十二話『さっそく修行・・・え、ベルト禁止!?!』

「久しぶりだな、こっちに帰ってくるのも」

「相変わらず寒いわねえ。でも、暖かい雰囲気があるから不思議よ」

「確かに、ポツケってやっぱりいいよな」

ようやくポツケ村に到着した我がリシェヴィ家。
まずはここの村長のところに挨拶に行こうか。

「お久しぶりです。村長」

「お元気そうで何よりです」

「おお、久しぶりだね三人とも」

ポツケの村長はちっちゃなおばあちゃんだ。

ゲームのボイスだと意味の分からんことばかり言ってる。

あるえ？

そういえば・・・

「村長のばあちゃん。ネコートさんはどうしたん？」

隣にいるはずの赤いコートのアイルー、『ネコート』さんがいない。

「おやおや、またどこかに出かけたみたいだ」

いいのかそんなんで。

あの人ギルドの人だろ？

・・・ああ、だからいないのか。

「にしてもマサトや。随分と吹っ切れたようだね」

「・・・まあ、そんなもんですよ」

・
リサにはし損ねたが、愛する二人にはキツチリ？ 思いは伝えまし・・・

「好いとる女子おなごに思いを告げたかの？」

・・・何故バレたし

「あんたに隠し事はできんな」

「百年早いさね♪」

「ま、それもこれから頑張るとして、そろそろじいちゃんばあちゃんに挨拶行ってくるわ」

「そうかい。クエスト受けなくなったらいつでもここに」

「りょかいっ！」

「オッス、二人とも元気してた？」

「ん？・・・マサトか。よく来たな」

「いらっしやい。随分男らしくなって」

現在俺が向かい合っているのが、我が祖父母

『コウヘイ・ムラカミ』

と

『ユリア・ムラカミ』

正直、記憶取り戻した次の日に気付いた瞬間吹いた。

しかもこの祖父であるコウヘイのほうが俺の名前を付けたという事を以前聞いたため、『狙ったな・・・』と思ってしまうのも・・・悪くないだろう？

何のことかよくわからない人は、うん・・・ウィキある？
そのファイズの項を見るとわかるよ。

しかもさあ・・・そっくりなんだよね。あの二人が年取ったらこうなるんだろうな。

・・・俺？

自分で言うのもなんだけど、明らかにたつくんだぜ？

ビックリしただろ、っていうか自分でもおかしいと思ったわ。

マサトなのにたつくんとはこれいかに？

じいちゃんの性格はまともだ。っていうか二人とも性格は違う。ばあちゃん曰く『昔はよく後ろからついてきてた』らしいが。

・・・怖いわ。

「さて、早速だがお前にはクエストに行ってもらおうぞ」

「・・・は？」

このパパ何をイッタノカナ？

「それがいい。ちょうどいい標的もいるからな」

このジジイもナニッテルノカナ？

「ああ、あとベルトは使用禁止だ」

「うそん!？」

・・・いきなりすぎるだろ！

「あれまあ。もう来たのかい？」

「あんた絶対知ってただろ。だからさっき『クエスト受けたくなったら』なんて言いやがったな」

どうかねえ・・・と首を傾げる村長・・・ムカつく。

とにかくなんだ？

流石に古龍なんて考えるのは早急過ぎるだろうが、ウチの家の男衆の『ちようどいい』は『どこかおかしいよ』レベルだから。

俺は違うぞ！？

あんなチート連中と一緒にすんな！

「で？なんだクエスト内容は」

「この頃、こちら辺でまた『轟竜』が暴れるようになって、こちら辺の者は困って・・・どこへ行く気じゃ」

「FU・ZA・KE・RU・NA。ここに棲みつくのはアホか実力持ちのどっちかだろうが！！」

そんなことになったのも、父さんを含めたムラカミ家のせいだ。

昔・・・2nd Gの初期にあたるような時期がこの村にもあり、当時のじいちゃんやティガレックスを葬り去った。（だがゲームの世界とは違う）

だがポポが多く生息するこの地域をティガレックスのような竜が狙わない訳もなく、その度に切って捨てて殴ってボコって・・・。

その結果・・・ここにくるやつは単なるバカか、相当の実力をもったバカになった。

どっちもバカだって？

実力があるうがなろうが、人外魔境こくにくるやつは全員バカだろうに。

「ちなみに俺が断ったら？」

「どうなるか分かっておるお主は、最初からその気などなかっただろうに」

「・・・当たり前だ。曲がりなりにもハンターだぞ」

俺がいなくても父さんとかが容易く狩ってくるだろう。

だがそれまではどうする？

その短い時間の間に、ティガレックスが事を起こすとも限らない。

なら俺の使命は・・・

「村やその近辺に被害が行く前に、速攻で潰す！！」

「少々気になるが、前半は完璧だねえ。・・・よろしく頼むよ」

「任せとけ！」

そう言って俺は村を出る道に入……。るつもりだったけど。

「ユクモ^{マサトバージョン}M装備で行かないとダメか？」

「ホットドリリンクは必須さね」

どうやら、寒さに凍えるクエストになりそうだ。

「ベルトは禁止なのに、バイクの使用はありなんかい」

『時間もないからそういうものだよ』

今回の出撃にはバツシャーを使う。

バジンとスライガーには留守番してもらうぞ。

そしてサイドカーは後ろに連結した。

あれ横に付けたまんまだと道通れないじゃん。

『どうせ不便ですよ・・・』

「拗ねんなって。第一俺がカイザを選んだのだって、お前が好きだからなんだし」

『本当！？・・・ありがとう』

「どういたしましてっ！」

アクセルを吹かして、さらにスピードを上げる。

「ベースキャンプに支給品まであるのか・・・」

準備はできてたみたいだな。

「よし行くか！あ、バツシャーは待ってろ」

『はい・・・』

ユクモ装備で正直寒いが、ホットドリンクの数だけは半端ないぞ。こういうところでも、リアルハンター生活の恩恵がある。

大タル爆弾系でもない限り、基本的にアイテムなんて被っても大丈夫。

その代り、流石に他のアイテムを持つスペースが減るけどな。

「・・・やっぱりほとんどいいないか」

エリア1に出た時点で、十分飛竜種の兆候が出ていた。

やはり草食系のモンスターが少ない。

進むしか、ないよなあ・・・。

そういえばモンスターのフルネームっていちいち言うのもめんどくさいし、略そう。

ということとで普通に・・・

「ティガアアアア!!」

「ゴオオオオオオツ!!」

・・・アルエ？

今の叫びは某光の戦士的なノリで言ったんだけどなあ？

俺の魂の叫びに呼び寄せられたのは、神様曰く『来年の映画にでない不遇な奴』ことウルトラマンティガ・・・ではなく、被っているのは三色構成（しかも色は違う）な恐竜頭。

「ティガちゃん、空気嫁」

「ガアアアアアアア！！！！」

轟竜・ティガレックス

「危なっ！こっちくんなボケ！！」

あまり距離が開いていなかったため、その顎で噛みつきを繰り返してくる。

それをサイド＋バックステップで回避、距離を空ける。

だが回避だけで終わらせるつもりもない。

右腰に新しく装備した専用剣『プラクティカソード』・・・まあつまり練習剣だが、そいつを抜きながらツーステップで顔の横に。

「うらあっ！」

不意をつくぐらいのスピードのはずだったが、またもや頭だけ『クイツ』と避けられてしまった。

ブラクティカは真っすぐな両刃の剣だ。

ニンジャソード系よりは長いが、それでも俺には短めだった。

ならば・・・

「これならどうよ!!」

背中の鉄刀を左手で引き抜く。

やっぱり長年使ってきた太刀を今更捨てるわけにもいかず、右手でブラクティカを振るうため左向きに差していたソレを片手で叩きつける。

もとは大剣に分類されていたものだ。

現在の大剣には及ばないにしろ、重さは十分!!

ザシュツ

「入った!!」

「ガアウツ!」

「っ!・・・痛ってえ」

入ったはいいが、顔の真横に居たためにティガの左腕を防ぎきれな

かった。

「やるねえ・・・お前」

「グルルルル・・・」

激昂してそのまま跳びかかってくるかと思えば、あくまで様子見をするようにこちらを凝視してくるティガ。

こいつは『強い』

「ちょっと・・・不味いんじゃない？」

俺、この装備じゃ不安なんだけど・・・

・・・次回へ続く

【現在のマサト】

『VS轟竜・ティガレックス』

『想定ランク・上級以上』

・ユクモM装備（特別製・スピードについては問題ないが防御が万全ではない）

・練習剣『プラクティカソード』

・太刀『鉄刀【神楽】』

・地図

・ホットドリンク

・回復薬

・閃光玉

・砥石

ごめん、勝てるかわかんねえ

第十二話『さっそく修行・・・え、ベルト禁止!?!』(後書き)

ベルト禁止で大丈夫か？

(；X) 大丈夫じゃねえって言ってるだろうが!!

オリジナルの武器『プラクティカソード』は長めの片手剣みたいな解釈でいいです。

その名の通り『練習剣』ですが、強度はシャレになりませんw

ジャンル分けできない武器を、マサトは多用する予定です。
っていうかゲッター武器も早く出したい!!

それでは

第十三話『弱さは戦いの選択肢も無くす』（前書き）

明けましておめでとうございます！

新年初投稿！

でも内容は暗め。

んじゃま張り切って・・・クエストスタート！！

第十三話『弱さは戦いの選択肢も無くす』

さて、前回勝てるかどうかからんという趣旨の発言をした俺ことマサトだが、修行に来て一日目で死ぬわけにもいかんから。

「勝たせてもらうぞ！」

あえて真正面から突っ込んでいく。
ティガは再び左手を振るってくるが、

「何度も食らうか!!」

斜めからスライディングで、体の下へ滑り込む。
幸い雪は結構固まっているので、滑りはよく体の下でストップとかもない。

で、そのまま・・・

「ちょっとオーズっぽくいくぜえ!!」

あのオーズがジャリ剣を初めて使った時の感じで、下から腹をプラクティカで切り裂く。

刃が短めなせいで深くは裂けなかったが、スライディングのスピードとかも考えるとちょうどいいぐらいだ。

「ギャアアア!？」

相手がいなくなったと思ったら腹に激痛とくれば、ティガも痛みで叫ばざるを得ない。

そのまま体の下を抜けた俺は、もう一度左手で薙ぎ払う様に鉄刀を振るう。

目標はティガの尻尾!!

・・・が

「のわっ!？」

抜くときの金属音で気付かれたのか、それとも偶然か、ティガの尻尾で鉄刀が弾かれてしまった。

あゝ、すごい飛んでったんだけど・・・。

どんだけ思いつきり尻尾を振ったのかは知らんが、かるく20メートルは離れてしまった。

足腰には自信があるが、こいつに背を向けたらそれだけで人生が終わる気がする。

で、残った武器が・・・

「こんな小刀^{プラクティカ}だけ・・・」
「グウウウウ・・・」

奴さんはやる気満々だし。

「か、かかってこいやあ!!」

「ガアアアア!!」

助けてドラ〇もおおおおん!!!!

『は〜い』

「グウツ!?!」

「なんとお!!?!」

突如落ちて来たプラカードと、雨のように降り注ぐ銃弾。

俺に飛び掛かりかけたティガに命中していくが、もちろんすぐ近くに居た俺にも降り注ぐわけで・・・。

「バジンゴルア!! てめえ帰ったら覚えとけよお!!」

『や・・・優しくしてね』

「だあってろ!!」

上空にいる相方その2に呪詛の言葉を吐きつつけながら、エリア6

（洞窟の入り口）からエリア5（洞窟内通路）へと退避した。

「まったくテメエは・・・当たったらどうすんだよ!!」

『大丈夫、当たったら看びよ、痛っ!』

バトルモードのバジンに蹴りを入れながら、逆にバジンが回収した、『折れた鉄刀』を受け取る。

「こいつには当てまくりじゃねえか」

折れたというより、撃ち碎かれたソレを鞘に納める。

これで真正正銘、武器がプラクティカだけになったわけだが・・・。

「・・・お前はなんでケースを持ってんだ」

『お父さんから、【もしもの時は使え】って預かってきたんだけど?』

・・・ちえっ。こうなることも予想済みか。

『使う?』

「いや、いい。『まだその時じゃない』からな」

今ここで使ったら、俺は世界の鼻つまみ者だ!!

・・・なんて大それた話ではないが、ここで使ったら、これからも

俺はベルトの力に頼り続ける。

この世界に来る前こそ『仮面ライダー』だけを目指したが、今の俺は違う。

今の俺は、『モンスターハンター』で、『嫁さんいっぱい幸せ』な『仮面ライダー』を目指してるんだ!!
プラクティカを引き抜いて、洞窟の外へと歩き出す。

『・・・援護は?』

「いらね。・・・あんなやつ、俺一人で十分さ」

もう既に援護受けた後だったけどね（笑）

『気を付けてよ』

「ヘイヘイ・・・って、お前は俺の彼女か」

それだけ言って、俺は洞窟の外へと飛び出した。

・・・後ろにイヤンイヤンと体をくねらせるバジンがいることに気付かず。

「オッスおらマサト！」

「ギャアアアアッ！！」

キレてる・・・。

眼血走ってるし。

「グスン・・・行くぞこらあ！！」

プラクティカを逆手に持って駆け出す。

それに対してティガも、口を大きく開いて突進を繰り出してきた。

「あゝらよつと！！」

ギリギリまで近づいた瞬間、自慢の脚で・・・跳んだ。

「ガアウッ！！・・・グウ？」

俺に噛みついたと思っていたティガは、目の前から突然俺が消えたことで首を傾げる。

キレてたと思ったんだが、意外と冷静か。

で、俺は・・・。

「ヘイ、タクシー？どこまでなら運んでくれるのかな？」

ティガの上に陣取っていた。

「グア！？」

首を曲げ、なんとか背中の中の俺を確認するティガ。
おお、顎をがっくんと開けてるティガ、なんかクセになりそう。

「だがしかし!!」

ここで俺が仕留める!!

ここならあいつの手は届かない。
だからやり放題さ!!

ザスッ!

ザスッ!

ザザンッ!

ティガの背中をどんどん切り付ける。
うわぁ・・・なんかただの悪役みたいだな。

大自然からすれば悪役も同然・・・でも、

「・・・俺はハンターなんだよ!!」

「ガァァァ!!!!」

背中にいる俺を振り切れず、痛みに苦しみながら辺りを走り回るティガ。

先程の発言のすぐ後と言うのに、俺の腕は動きを鈍らせる。

・・・何を今更。

俺だって既に、大型モンスターを何体も狩ってきている。
小型なら尚多い。

今更になって、命を奪うことに躊躇いを持つ資格なんてない。

『正々堂々』だろうが『卑怯な手』を使おうが、『狩り』をしていることに変わりなんてない。

だから俺は・・・

ティガレックスの頭に、剣を突き刺した。

「・・・・・・・・」

骸となったティガレックスの体から、黙々と素材を剥ぎ取るマサト。
ここは雪山、いくら腐りやすいモンスターの死骸と言っても、ここら辺一帯ならそれほど心配する必要はない。

だが彼は、血で濡れたその顔を拭おうともせずに、彼は作業を続けていった。

『終わったみたいだね』

「・・・まあな」

いつもならハイテンションで答えるであろうマサトだったが、今はどうにも明るくなれない。

モンスターのの上に飛び乗り、そしてラストは頭蓋を一突き。普通に考えればこれはすごい事だ。

だが彼にとっては違う。

彼にとっては・・・『これしかできなかった』のだ。

他人に言わせれば『あれだけの事をしておいて何を言うのか』

だが彼からすれば『ああでもない狩れなかった』

「もっと正々堂々・・・正面から狩りをしたかったなあ」

どれだけ言ってももう遅い。

既に決着はついて、勝者は彼なのだ。

ある程度剥ぎ取り、逆に生肉を出す。

「バジン、こいつに『家族』は・・・いるのか？」

『どうやら巣がこっちにあったみたいだね。子供が三匹いるよ』

「そっか・・・」

他には成体はいないようだ。

母子家庭か父子家庭かは知らないが、とにかくマサトの次の行動は決まった。

「これさ、そこに置いてきてくれよ」

『無駄に・・・なるかもしれないけど？』

「いいさ。何度だって送ればいい」

それは本当に無駄なことだ。

確かにその子供たちは生き延びることができるだろう。

だがその後はどうする？

成長したら、その子供たちは自分に仇なす存在になる。
そうなった時・・・。

『狩ることが・・・できるの？』

「・・・わかんねえよ。でも・・・」

—今だけでも—

—罪を償ってる『気分』にさせてくれ—

それを聞くと、バジンは渡された肉を持って飛び去って行った。

S i d e マサト

『・・・おかえり』

ベースキャンプに着くと、そこで待機していたバツシャーがモニターを投影してそう言ってくれた。

ドットを使つてるところを見ると、どうやら事の顛末を知っているようだ。

「ただいま。帰るぞ」

『えっ、待たないの?』

誰を・・・ああ、バジンか。

待つと言っても、ティガの巣がここからどれくらい離れてるかなんてわからない。

辛うじて、この雪山という広大なフィールドの括りの中にあることしか聞かなかった。

「待っててもしょうがないだろ。ホレ」

『うーん・・・しょうがないか』

まさに渋々と、バツシャーは前進しだした。

基本的に運転は俺がやるが、スタートに関してはこいつらの意思次第だ。

ま、『フォン』を使えば、強制的に命令して動かすことができるんだけどな。

んなこと、やるわきゃないだろ。

『そういう優しいところ、嫌いじゃないわ!』

「はいはい」

S i d e
バジン

今私は、例のティガレックスの巣の上を飛んでいる。

巢の中には子供が三匹だけ。

この子達以外のティガレックスは、このフィールドにはいない。

ゆっくりと降下していくと、巢の中の一匹が私の持っている生肉に反応して顔を上げた。

幼すぎて、『相手』ではなく『肉』にしか反応してない。

・・・このままじゃ、この子達はすぐに・・・。

ここで食べ物をあげても、すぐに自然界に吞まれてしまう。
でも、私は彼の言葉が頭に残っていた

―罪を償ってる『気分』にさせてくれ―

無駄だって、そんなことは分かってるのに、彼はそれをさせようとする。

『無責任な人』

目の前の子たちが生き残れないのもわかってるのに・・・。

だから私は少しだけ、この子達にチャンスを与えようと思う。

『あなた達がこれから丸一日生き残れたら・・・』

『迎えに来るから』

「「「キュウ？」」」

そのプラカードを巢に突き刺して、私は飛び立つ。

そして翌日、巢の中にいたティガレックスの子は・・・

「キュウ・・・」

一匹だけになっていた。

そして私はその子連れて帰る。

あの人がどんな反応を示すのか、少しだけ楽しみである。

第十三話『弱さは戦いの選択肢も無くす』（後書き）

実力が無いからこそ、『マサトの考える』卑怯な手を使わざるを得ないというお話。

・・・飛び乗ったりする方が絶対に凄いやね！？
でもマサトとしては『血沸き、肉躍る戦い』をしたいと考えてるよ
うで。

モンスター
自然を狩るハンターだからこそ、真正面から戦いたい。

彼のこの考えは、これからどう変わっていくのか。

そしてバジンが拾った一匹のティガレックス。
いったいどうなっていくのか。

いつになったら変身するのか。

そしていつになったらゲッターマホークとゲッターウイング（あとオリ武器とかも）が出てくるのか。

それではまた次回！

第十四話 『さあお待ちかね修行の時間だ！なに？色気が無い？俺だって欲しいわ

っていうことで第十四話。

今回はサブタイでマサトが叫んでるように色気が無い。

ティナ、ルー、リサの三人をあっちに置いてきたのは間違いだった
かもしれない。

ならば早く第四夫人出せよ自分！！

・・・二、三話先だな。

それでは、クエストスタート！！

第十四話『さあお待ちかね修行の時間だ！なに？色気が無い？俺だって欲しいわ

へーろー。

今日も元気に・・・とはいかないが、ハンター修行中のマサトです。

ティガレックス討伐から早一か月。

結局『クヨクヨするぐらいなら』と修行に身を入れ始めた今日この頃。

―強くなれば、あんな思いなんてしなくても済む―

それだけを考えて頑張ってきた。

「ボーーーーとしてちゃ駄目よ！」

「のわっ！」

現在は母さんが修行相手。

ガンナーである母さんの弾丸をひたすら避ける・・・という、ちびっ子時代にもやってた事だ。

だがまあ・・・

「お、おっかしいなあ！なんか！前よりも、速く、なって、ない！？」

そう、速い。

弾速が前とは比べ物にならないのだ。

確かに、ヘビィボウガンはの放つ弾丸は『威力が高い』。

それは弾のスピードだったり、着弾後の効果だったり弾丸の種類にもよる。

だがそれを超える威力やスピードを出すにはどうするのか。

ボウガン自体の改良である。

って言う和普通なんだけど、うちの母さんおかしいよ。

最大まで強化するとそれ以上が無理になるのは、安全面など使用者の体を守るためでもある。

なのにこの人・・・

「なんで！体に負担とかかからないんだよ『そんなので』！！」

限界を突破し、リミッターなんて遥か彼方に放り投げた『龍木ノ古砲【荒神】』。

この人、あのタコと言う名のヤマツカミをムッコロしてるってことか。

使えないはずの貫通弾を使ってくるせいで岩陰にも隠れられず、

「それは・・・鍛えてますから？」

チクショーー!!

謎の連射性能、命中率の高さ。

そして母さん自身の技術による、元のソレからは考えられない高速リロード。

その分反動は凄まじい・・・はずなんだけどな。

そんなのを無視して撃ってくるこの人の体が心配だ。

「マサトの気持ちは嬉しいけど、お母さんの心配なんてしてる余裕なんてあるのかな？」

「ヒィッ!？」

お、俺の前髪が数本ぶっ飛んでった・・・。

—こ、殺される—

「やだわぁ。私があなただを殺すだなんてすると思う？」

「なら手に持ってるボウガンを下げて!!マジで!!」

「むーりよー♪」

今度は何だ・・・!!!?

S A ☆ N ☆ D A ☆ N ! ?

「ま、マイマザー!! ベルト仕様の許可を求めます!!」
「うーん、どうしようかしら」

待ってられるか!!

「バジン!!」
『はい』

近くに控えていたバジンの下まで走り、シールドでガードして貫いながらケースを受け取る。

このサイズは・・・

「デルタか!!」

ボタンを押さないといけないカイザやファイズが来なくてホントよかった。

ナイスバジン!!

『えへへ♪』

ベルトを巻きつけ、デルタフォンを口元に「簡単にはやらせないわよ」のわっ!

飛んできた弾を飛び込み・・・もう緊急回避でいいか、で避ける。

ドドドドドオオオン!!

「か、拡散・・・弾、だと」

さっきまで俺の居た場所の周辺が、ドデカイクレーターになっている。

足腰鍛えててよかったと、これほどまでに思ったことは無い。

「ホントに殺す気じゃねえか！？変身！！」

《Standing by》

《Complete》

再び迫る弾丸を前転回避しながら変身する。

「そんなつもりなんてないわ」

「嘘付け！！」

装着したデルタフォンをデルタムーバーごと取り外す。

「Fire」

《Burst Mode》

簡単かつ何度も真似たからこそできるこの発音！！

バシユンッ！

・・・ふざけるのやめよう。

デルタムーバー・・・戦闘時はビデオカメラとしてなんて使わないからこれで統一な。

とにかくデルタムーバーの銃口を飛んでくる弾丸に向ける。

「通常弾なら余裕!!」

ムーバーのトリガーを引くと、銃口から青い光弾が放たれて、母さんの『凶弾』を撃ち落とす。

「凶弾なんてひどいじゃない!」

「うるさい! どう考えても凶弾じゃボケェ!!」

かなり汚い口をきいたが、そんなことは戦闘中の俺達は気にしない。

そう・・・戦闘中ならだ。

たまに覚えてるからなあ・・・。

その時は『教育』と言う名の『お仕置き』が・・・ガクガクガクガク。

その後も続く銃撃戦。

俺は母さんに弾を当てるわけにはいかないが、あっちはマジで当ててくる。

なんでか知らんが無茶苦茶痛いぞ。

ライダーズギアの防御を超えてくる衝撃。

・・・流石モンスター用に開発された物から、リミッターを外しただけあるよ。

更に銃撃戦が続いていたそんな中、突然母さんが真下に弾を放った。

「・・・なんだ？」

バックステップで距離を離れた瞬間、爆発と共に砂埃が立ち込め、俺の視界を塞ぐ。

使った弾は徹甲榴弾だと思う。

だが何で？

自慢ではないが、視界を防がれたぐらいで一方的にやられるような俺じゃない。

でも不安なので、ムーバーのモニターを開き、能力をフルに使って索敵。

母さんは先程バックステップして到達した地点から動いてない。
・・・でもなんか体勢低くない？

何と言うか・・・しゃがんでるよう・・・なあっ!？

「あぶねっ!!」

『顔面』を狙って五発以上の弾丸が、ほぼタイムラグ無しで飛んできやがった。

「うふふっ♪しゃがみ撃ちはき・ほ・んよ♪」

砂埃の晴れたその先には・・・しゃがんでボウガンを構える母さんと、その隣で様々な種類の弾丸を抱えるバジン・・・？

「バジンがルラギッタアアア!!」

ババババババッ!

フルオートの現代(ってか地球の)銃器かと言うほどの連射。

これが、『バジンのガトリングシールド』ではなく『母さんのヘビイボウガン』だからビツクリ☆

ってそれはしゃがんで撃ってるぐらいで到達するわけがないだろう!!

「くっそ!こっちの速さが足りねえ!!」

自分の限界に挑戦するかのごとくトリガーを引くが、あの化け物ボ

ウガンから放たれる弾を撃ち落とすには全然足りない。

「バジン！！ブレイガン寄越せ！！」

『えゝ？ちよつと手が離せないんだけどお？』

・・・ムカつくし、ならそのプラカードを持ってる右腕は何だコラ。

何てことを言い（？）ながらも、バジンは二つ目のケースからカイザブレイガンを取り出し、投げる。

もちろん母さんへの弾丸の供給も忘れずに。

「っしや！行くぞー！！」

ムーバーを持ちながら、ブレイガンのコッキングレバーを引く。

《Burst Mode》

反動なんてないこの二つの銃器を両手に構える。

・・・やばい。

自分でやっててカッコいい。

因みに説明が遅れたが、ライダーズギアの三つが『俺専用』である
ということは、

『全ての武器』を『どのライダーに変身していても使える』

ということでもあるらしい（神様談）。

（「ふふっ！偉いぞ私は！！」）

エ○いの間違いだろ。

あと入ってくんな、戦闘中だぞ。

（「久しぶりの登場だというのに、どれだけ意地が悪いのだ・・・
うう」）

・・・その代り、あとでしっかり『可愛がって』やるから。

（「ホントか！？激しくしないな！？」）

俺流でな☆

（「『こんな奴嫌いだ』と言えないぐらい好きなのが悔しい・・・」
）

・・・今の発言は何気に嬉しかったから、今日は優しくしようと思う。

「やるわねマサト！でも・・・まだまだ続くわよお？」
「望むところだ！！」

二つの武器のトリガーをとにかく引きまくる。
ブレイガンから放たれる弾丸は、使用するライダーがデルタだから、色も金から青になってたりする。

威力もアップだ！！

チュウンッ！！（顔の真横を掠めた音）
バアン！！（そして真後ろの岩が砕け散った音）

威力・・・上がってるんだよね？

「なんでこっちが負けてんだよおおおお！！？」

「母さん特製の『貫通弾Lv4』よ！」

「それは最早貫通弾じゃねえだろ！！」

貫通どころか砕け散るってなにさ！？
う、うわぁ・・・掠めた部分からまだ煙出てるよ。

ガチャンッ

これって・・・

『積んだね☆』

チクショーーーー！！！！

「ホント、便利よねこのベルト」

「そりゃな。ここよりももっと進んだ文明の産物だし？」

デルタギアをぶらぶらさせながら、俺達の前を歩く母さんはそう言
った。

ちなみに俺は、バトルモードのバジンにおぶって貰ってる。

意味の分からんチートな母親のせいで・・・オレノカラダハボドボ
ドダァー！！

ということまで体が動けるレベルじゃなかったため、こうして機械の
相棒に身を任せてるわけだ。

「絶対、俺個人で使える防御アイテムが必要だぞコレは・・・」
「そうね。堅牢かつ、あなたの素早さを損なわないものが必要になる」

どんな攻撃でも防ぐ無敵の『盾』になってくれるもの・・・。
そして・・・

「どうせなら付けててカッコいいのが最高だ」

そう。

どうせならカッコいいのが欲しい。

例えば・・・うゝん・・・。

「マントなんてどうかs「それだぁ!!」び、びっくりするじゃないの」

ナイス母さん!!

これで決まった。

追加装備はマントだ!!

異論は少しだけ認める!!

『でもマントじゃ防御力が期待できないような・・・』

「「・・・あ」」

マントはいいけど、まだ少し苦労しそうです。

第十四話 『さあお待ちかね修行の時間だ！なに？色気が無い？俺だって欲しいわ』

魔改造ヘビィボウガン。

給弾ベルトがあれば完璧。

しかも弾種はオールOK

マサトの母さんはチートw

お父さんもおじいちゃんもおばあちゃんもチートw
ただのチート一家です。

ここでもうやく、追加アイテムその？『マント』の影が！！
っていうかマントと言う名の『ゲッオーウイング』

説明通り、ライダー装備はいつでもどこでも何に変身してても使えます。

彼の持つ三つのギアは互換性ありまくりです。

二丁拳銃どころか二刀流までお手の物。

因みにフォトンブラッド・・・害無し！！

これもあそこらへんで後ろから突かれてる神様のせいです。

こっちにいる間の基本的なお色気担当が、神様しかない現状。
しかも出番なし。

早く新キャラ出そうぜ！！

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6742x/>

モンスターハンターカイザ～変態転生者の狩猟記～

2012年1月10日01時50分発行